

# 川越田遺跡Ⅱ

(B・C地点の調査)

児玉町遺跡調査会

かわ ごとえ だ  
川越田遺跡Ⅱ

(B・C地点の調査)

1993

児玉町遺跡調査会

## 序

埼玉県北部に位置する人口2万人余りの児玉町は、南側に陣見山をはじめとする標高500m級の山々が連なる上武山地を背し、北側にそれらの山麓から延びる丘陵や低台地と、清流の小山川や女堀川によって開析された沖積低地を有する、自然と緑に恵まれた町であります。このような自然環境に恵まれた当町は、太古の時代より大変住み良い場所であったようで、現在町内には300箇所以上の埋蔵文化財が存在し、県内でも有数の遺跡の宝庫として知られております。

これらの文化財は、我々の住む地域の歴史を知る上でかけがえのない文化遺産であるとともに、国民共有の貴重な財産として、後世に守り伝えていかなければならないことは、現代に生きる我々の重要な責務の一つであると考え、その保護と啓蒙に努力して参り、文化振興の一環としてその活用を図ってきたところであります。

今回の本庄今井工業団地取付道路建設に伴って発掘調査された川越田遺跡につきましても、その保存措置について関係機関と協議を重ねてまいりましたが、現状での保存は困難であるとのことから、やむをえず破壊される部分については、発掘調査を実施して「記録保存」という形で後世に伝えることになったものです。

発掘調査から本書刊行までに、埼玉県教育局文化財保護課及び本庄市をはじめとする関係機関や多くの方々よりご協力を賜ったことにたいして、心より感謝申し上げますとともに、本書が学術研究や様々な教育活動に広く活用されることを念願する次第であります。

平成5年3月15日

児玉町教育委員会教育長  
児玉町遺跡調査会会長

富 丘 文 雄

## 例 言

1. 本書は、埼玉県児玉郡児玉町大字高岡字梅沢・北田下ノ一丁に位置する川越田遺跡B・C地点の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、今井工業団地取付道路建設の拡幅工事に伴う事前の記録保存を目的として、本庄市の委託を受けた児玉町遺跡調査会が実施した。なお、現地発掘調査及び整理作業は恋河内昭彦が担当した。
3. 発掘調査の期間は、平成4年3月2日～3月25日と平成4年11月24日～平成5年1月31日の約3ヶ月を要し、報告書刊行のための整理作業は、平成4年12月10日～平成5年3月25日の期間に実施した。
4. 発掘調査地点は、埼玉県埋蔵文化財調査事業団が昭和56年～57年にかけて児玉工業団地取付道路建設に伴って発掘調査を実施した地点をA地点とし、今回発掘調査を実施した南側拡幅部分をB地点・北側拡幅部分をC地点と呼称する。
5. 遺構番号は、A地点で検出された遺構と同じと考えられるものは同一番号とし、新たに検出された遺構についてはA地点からの続き番号とした。
6. 本書の執筆及び編集は、恋河内が行った。
7. 発掘調査及び本書刊行にあたって下記の方々や機関より、ご助言・ご協力をいただいた。記して感謝いたします。

赤熊浩一、浅野晴樹、伊丹 徹、市川 修、井上高明、今井 宏、岩瀬 譲、太田博之、金子彰男、坂本和俊、佐藤好司、篠崎 潔、須田英一、外尾常人、高橋一夫、田村 誠、富田和夫、長瀧歳康、中村倉司、長谷川勇、増田一裕、丸山 修、丸山陽一、水村孝行、宮井英一、宮本直樹、矢内 勲、

埼玉県教育局文化財保護課、埼玉県埋蔵文化財調査事業団、本庄市建設課、真下建設、

8. 発掘調査及び本書刊行のための整理作業には下記の者が参加した。  
青木フク、飯島満江、池田芳野、磐上クラ子、内田ナカ、生形サト、生形静子、梅沢トモ子、小賀野フジ、黒崎百合子、久米とし子、小島森平、小林節子、沢本スミ江、鈴木利一、鈴木美江、関根喜久子、関根トヨ、出牛イネ子、戸沢ミチ子、戸谷昭太郎、中よし江、中里広子、野本キク江、野本ミチ子、長谷川光広、山田松枝、分須一三、渡辺裕子、

# 目 次

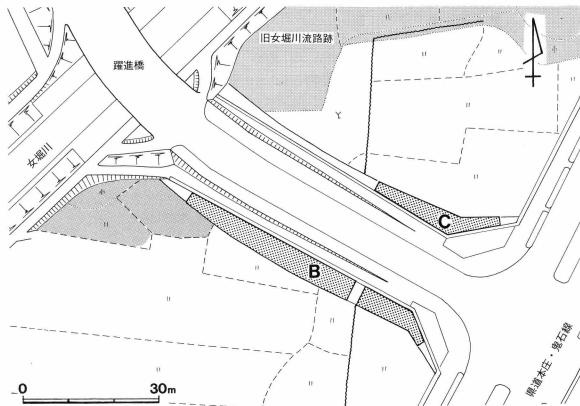
序	
例 言	
第Ⅰ章 発掘調査に至る経緯と経過	1
第Ⅱ章 遺跡の地理的・歴史的環境	3
第Ⅲ章 川越田遺跡の概要	5
第Ⅳ章 検出された遺構と遺物	9
第1節 住 居 跡	9
第2節 土 壙	31
第3節 溝 跡	32
第4節 河 川 跡	35
第5節 その他の遺構と遺物	44
第Ⅴ章 川越田遺跡出土の叩き甕について	51
参考文献	57
写真図版	

平成3年度児玉町遺跡調査会組織

会 長	富丘文雄 (児玉町教育委員会教育長)	理 事	吉川 豊 (児玉町教育委員会社会教育課長)
理 事	田島三郎 (児玉町文化財保護審議委員長)	監 事	日向國俊 (児玉町文化財保護審議委員)
	清水守雄 (児玉町文化財保護審議委員)		安久沢一 (児玉町企画財政課長)
	武内和雄 (児玉町文化財保護審議委員)	幹 事	前川由雄 (児玉町教育委員会社会教育課長補佐)
	中兼久偉 (児玉町文化財保護審議委員)		岩上高男 (児玉町教育委員会社会教育課長補佐)
	永尾憲司 (児玉町総務課長)		金子幸弘 (児玉町教育委員会社会教育係主任)
	高橋 寛 (児玉町産業課長)		鈴木徳雄 (児玉町教育委員会社会教育係主任)
	山口雄朗 (児玉町土地改良課長)		渋谷路子 (児玉町教育委員会社会教育係主事)
	木村和雄 (児玉町土木課長)		恋河内昭彦 (児玉町教育委員会社会教育係主事)
	杉村義昭 (児玉町都市計画課長)		徳山寿樹 (児玉町教育委員会社会教育係主事)

平成4年度児玉町遺跡調査会組織

会 長	富丘文雄 (児玉町教育委員会教育長)	理 事	井上英夫 (児玉町教育委員会社会教育課長)
理 事	田島三郎 (児玉町文化財保護審議委員長)	監 事	安久沢一 (児玉町企画財政課長)
	清水守雄 (児玉町文化財保護審議委員)		幹 事
	武内和雄 (児玉町文化財保護審議委員)	岩上高男 (児玉町教育委員会社会教育課長補佐)	
	野口敏雄 (児玉町文化財保護審議委員)	清水 満 (児玉町教育委員会社会教育係長)	
	小島和子 (児玉町文化財保護審議委員)	鈴木徳雄 (児玉町教育委員会社会教育係主任)	
	永尾憲司 (児玉町総務課長)	田島賢二 (児玉町教育委員会社会教育係主任)	
	高橋 寛 (児玉町産業課長)	渋谷路子 (児玉町教育委員会社会教育係主事)	
	山口雄朗 (児玉町土地改良課長)	恋河内昭彦 (児玉町教育委員会社会教育係主事)	
	木村和雄 (児玉町土木課長)	徳山寿樹 (児玉町教育委員会社会教育係主事)	
	塚越政次 (児玉町都市計画課長)		



第1図 川越田遺跡B・C地点発掘調査位置図

## 第 I 章 発掘調査の経緯と経過

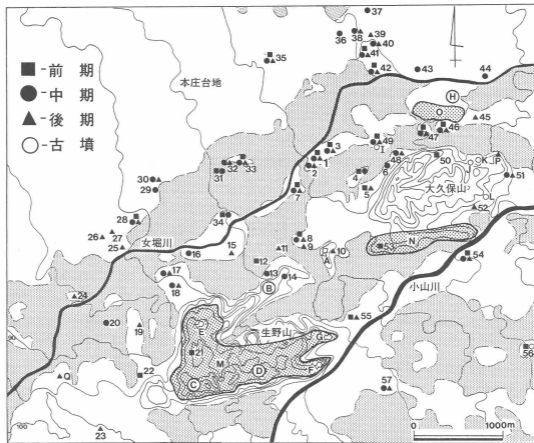
埼玉県本庄市大字今井から児玉町大字高岡の一部にかかる現水田部に建設予定の本庄今井工業団地は、「埼玉県新長期構想」並びに「埼玉県中期計画」による県北テクノグリーン構想に基づき、県北部の活性化と県土の均衡ある発展を目的として、埼玉県企業局が平成7年度の完成を目指して推進している事業である(埼玉県企業局1992)。この本庄今井工業団地造成事業の施行に伴い、平成2年8月8日に埼玉県企業局と本庄市及び児玉町の三者により、「本庄今井工業団地造成事業に関する基本協定書」が締結され、その中で施行区域内に所在する埋蔵文化財については、本庄市が発掘調査を実施することとされた。

平成3年12月10日、本庄今井工業団地造成事業の基本計画に基づく工業団地取付道路建設の事業委託を受けた本庄市より、「今井工業団地躍進橋取付道路築造に伴う文化財の発掘調査について」(本建発第459号)、その所在地の児玉町教育委員会に協議と依頼があった。この躍進橋取付道路は、児玉工業団地取付道路として建設されたもので、すでに昭和56年～57年にかけて埼玉県埋蔵文化財調査事業団により、川越田遺跡(A地点)として事前に発掘調査が実施されている場所である(富田他1985)。今回協議の対象となったのは、今井工業団地の取付道路としてその両側が拡幅されることになった部分(B・C地点)で、当然A地点と関連する遺構の存在が確実であることから、その建設にあたっては事前に記録保存のための発掘調査を実施する必要があることを回答した。そして、発掘調査の実施機関については、埼玉県教育局文化財保護課や本庄市教育委員会等の関係機関と協議した結果、取付道路建設部分は工業団地造成事業の施行区域外の児玉町に位置するため、児玉町教育委員会がその具体的な調整を行うことになり、児玉町教育委員会の指導のもと児玉町遺跡調査会が本庄市と委託契約を締結して発掘調査を実施することになった。

以上のような経緯を経て、平成4年2月3日に本庄市長茂木稔より「埋蔵文化財発掘通知」(本建第102号)が、児玉町遺跡調査会会長富丘文雄より「埋蔵文化財発掘調査の届出」が、児玉町教育委員会と埼玉県教育局を経て文化庁長官に提出され、3月より現地発掘調査を実施する運びとなった。なお、文化庁からは、平成4年4月24日付け委保第5の371号による「埋蔵文化財の発掘について」の指示通知があった。

発掘調査は、工事計画や遺跡調査会のスケジュール調整の関係から、平成3年度と平成4年度に分けて実施することになり、平成3年度については取り合せずB地点西側半分を対象とし、3月2日に本庄市と児玉町遺跡調査会で平成3年度実施分についての委託契約が締結された。現地の発掘調査は、平成4年3月2日～3月25日という年度末の厳しい時期に行われた。

平成4年度分については、当初平成3年度分に継続して実施する予定であったが、諸般の事情により予定がかなり遅れ、10月になってようやく平成4年度分の発掘調査に関する委託契約が締結された。しかし、現地の都合により実際に現地作業に着手できたのは、初冬の肌寒さを感じ始めた11月月末になってからである。そのため現地の発掘調査は、工事と並行して実施するという作業条件の中で、平成5年の1月末まで行った。



第2図 女堀川中流域の古墳時代遺跡

1 川越田遺跡(富田他1985)	20 高槻田遺跡(1988年調査)	39 栗師遺跡(本庄市1976)	A 鷺山古墳(坂本他1986)
2 梅沢遺跡(富田他1985)	21 生野山遺跡(埼玉県1982)	40 藤大通り竊内遺跡(増田1987~91)	B 金餅神社古墳(坂本他1986)
3 後張遺跡(立石1982・83)	22 御林下遺跡(1987年調査)	41 社貝路遺跡(長谷川1987)	C 物見塚古墳(菅谷1984)
4 飯玉東遺跡(駒宮他1979)	23 仲町遺跡	42 西富田本郷遺跡(本庄市1976)	D 生野山群羊塚古墳(柳田1964)
5 雷電下遺跡(駒宮他1979)	24 金佐奈遺跡(1992年調査)	43 雄漆遺跡(本庄市1986)	E 生野山鏡子塚古墳(菅谷1984)
6 根田遺跡(恋河内1990)	25 上真下東遺跡	44 笠ヶ谷戸遺跡(本庄市1986)	F 生野山16号墳(菅谷1984)
7 東牧西分遺跡(1988年調査)	26 辻ノ内遺跡(鈴木他1991)	45 久下東遺跡(増田1985)	G 熊谷1号墳(美里町1986)
8 浅見境北遺跡(1992年調査)	27 新宮遺跡(1991年調査)	46 七色塚遺跡(増田1987)	H 公郷塚古墳(太田1991)
9 浅見境南遺跡(1986年調査)	28 塚島遺跡(鈴木他1991)	47 下田遺跡(柿沼他1979)	I 四方田古墳(増田1989)
10 鷺山南遺跡(1983年調査)	29 平塚遺跡(1987年調査)	48 山根遺跡(増田1990)	J 前山1号墳(本庄市1986)
11 東田遺跡(1992年調査)	30 古井戸南遺跡(井上1986)	49 四方田遺跡(増田1989)	K 前山2号墳(柿沼他1978)
12 日延遺跡(1991年調査)	31 堀向遺跡(1988年調査)	50 浅見山1遺跡(本庄市1986)	L 東谷古墳(本庄市1986)
13 城の内遺跡(1991年調査)	32 藤塚遺跡(徳山1992)	51 東谷遺跡(柿沼他1978)	M 生野山古墳群(菅谷他1973)
14 新屋敷遺跡(1989年調査)	33 柿島遺跡(1989年調査)	52 大久保山遺跡(荒川他1986)	N 塚本山古墳群(増田他1977)
15 新野中遺跡(恋河内1989)	34 左口遺跡(1988年調査)	53 塚本山遺跡(増田他1977)	O 東富田古墳群(本庄市1986)
16 蛭川坊田遺跡(1990年調査)	35 諏訪遺跡(柿沼他1979)	54 村後遺跡(細田他1984)	P 新野山遺跡(本庄市1976)
17 辻堂遺跡(1990年調査)	36 富田新田遺跡(本庄市1976)	55 宮ヶ谷戸遺跡(1983年調査)	Q 八幡山城跡(柳 1961)
18 南街遺跡(1991年調査)	37 二本松遺跡(長谷川1983)	56 日の森遺跡(菅谷他1978)	
19 宮田遺跡(1991年調査)	38 夏目遺跡(長谷川1985)	57 樋ノ口遺跡(菅谷他1976)	



## 第Ⅱ章 遺跡の地理的・歴史的環境

本遺跡は、JR八高線の児玉駅より北東側約3.7kmの水田部内に位置し、関越自動車道本庄児玉インターチェンジの西側約100mにある県道本庄・鬼石線に隣接している。本遺跡周辺の地形は、埼玉県と群馬県の県境をなす神流川によって形成された神流川扇状地の扇中央部東端にあたり、南西から北東方向に向かって緩やかに傾斜している。神流川扇状地の東端は、南側の上武山地と児玉丘陵の境にあたる八王子―高崎構造線の断層崖付近に源を発する女堀川や金鑽川が流れており、これらの開析による比較的広い沖積低地が河川の両側に開けている。沖積低地の西側には児玉丘陵下から広がる低台地の本庄台地が、東側には児玉丘陵から河川の開析作用によって分断された生野山・鷲山・大久保山の残丘が列状に存在している。この沖積低地は、中央を流れる女堀川を中心にして、西側を本庄台地に、東側を残丘列によって画されるように帯状に展開しており、地形的に一つの小地域を形成している。

本遺跡の周辺は、この女堀川水系の中流域に位置し、古代より女堀川流域における農業生産の中心的基盤として発展した地域であり、ほ場整備施工前までは低地部内に一町四方の条里形地割りが広範囲に残存していた。このため当地域には各時代にわたり多数の遺跡が存在しているが、特に古墳時代の遺跡数の多さとその密度の高さは、県内でも屈指の地域と言える。これらの遺跡は、主に本庄台地の東側縁部、残丘上及びその周辺、低地内の自然堤防上の3つの地形的特徴を有する場所に立地している。本遺跡は、女堀川右岸の標高69mを測る自然堤防上に立地しているが、この低地内の自然堤防や微高地は、周囲よりも地が若干高いために畑として利用されており、ほ場整備施工前には水田部内に島島状の景観として見る事ができた。しかしこれらの中には、古代や中世の水田開発に伴ってかなり削平を受けたものもあり、本遺跡や後張遺跡なども大部分は水田下に埋没していたもので、事前の試掘調査などによって初めてその存在が明らかになった遺跡も多い。

女堀川中流域の弥生時代後期の遺跡には、本庄市山根遺跡(増田1990)や児玉町飯玉東遺跡(駒宮他1979)等の樽式土器を主体とする遺跡、本庄市大久保山遺跡(荒川他1986)や児玉町生野山遺跡(埼玉県1982)等の吉ヶ谷式土器を主体とする遺跡、そして美里町塚本山遺跡(増田他1977)や本庄市有勝寺北裏遺跡(本庄市1976)のように二軒屋式土器を出土した遺跡などがある。これらの遺跡は、数軒の住居からなる単一時期の比較的小規模な集落と考えられるものが多く、大久保山や生野山の残丘上やその下に広がる狭小な台地上に立地している。女堀川中流域の低地部内では、そのほぼ全域にわたってほ場整備が実施され、それに伴って多くの遺跡が調査されているが、その結果によれば低地内の自然堤防上や微高地には該期の遺跡はまったく存在せず、また水路等を掘削して低地内を積極的に開発していたような痕跡も認められない。このことから該期の集落は、比較的広大な低地部の開発を基盤としていたのではなく、集落が立地する残丘内の谷や台地内に入り込む小規模な開析谷を利用した水稲耕作と、集落周辺の畑作を基盤にしていたものと推測される。

古墳時代前期の遺跡は、弥生時代より継続して営まれるものは少なく、該期になって新たに出現するものが多い。現在のところ、本遺跡や本庄市社具路遺跡(長谷川1987)のように、前期中葉段階以降になって低地内に出現し、後葉～終末段階には低地内の児玉町後張遺跡(立石1982)のような大

規模集落を中心に、遺跡数が増加して中流域の全域に分布が広がり、沖積低地内を積極的に開発の対象としていたことが伺える。また、弥生時代後期にも集落が営まれていた児玉町飯玉東遺跡・生野山遺跡・美里町塚本山遺跡などにも前期の遺構が見られるが、これらの丘陵部を主体とする遺跡は、前期には方形周溝墓が築造され、墓域となっているものが多い。このような低地内への該期集落の積極的な進出を背景として、女堀川中流域右岸の中央部に位置する低い残丘上には、県内最古の古墳として有名な全長60mを測る前方後方墳の鷺山古墳(坂本他1986)が築造されている。当地域の前期遺跡から出土する土器は、児玉町雷電下遺跡(駒宮他1979)のように在地の弥生時代後期の系統を引く土器も若干残存するが、畿内・東海西部・北陸・南関東地方などの影響を強く受けたいわゆる外来系土器群が主体をなし、新しくなるに連れて東海西部系の土器が顕著になる。

中期の遺跡は、前期における遺跡の分布と大差はなく、低地内及びその周辺にさらに展開する様相が見られるが、後張遺跡や児玉町辻堂遺跡・南街道遺跡などのような、地域内に複数の大規模な拠点集落が出現し、それらを中心にして自然堤防上や本庄台地東側縁辺部及び丘陵部周辺に多くの小規模な集落が形成されている。これらの集落は、前葉頃は前期と同じく炉を伴う住居で構成されていたが、中葉頃よりほとんどの住居にカマドが付設されるようになる。該期の沖積低地開発も、前期からの低地開発を下地としていることが推測されるが、中期では前期に比べて低地内での溝の掘削が顕著に認められる。特に前期では地形的制約を強く受けた開発形態であったと推測されるのに対して、中期では低地内の自然堤防上や微高地上にも溝の掘削が認められ、児玉町高縄田遺跡や蛭川坊田遺跡では比較的規模の大きい直線的な水路が検出されており、地形的制約をある程度克服した組織的な開発が行われていたことが伺われる。このような前期からの継続的な発展を反映して、中期には墳丘規模60～70mを測る県北部で最大級の円墳である児玉町金嶺神社古墳(坂本他1986)・美里町生野山将軍塚古墳(柳田1964)・本庄市公卿塚古墳(太田1991)が、当地域内に築造されている。この3古墳は、墳丘規模や形態が類似し、それぞれ格子目印の埴輪を有するという特徴があり、相互に時間的差異があまり認められず、比較的至近距離に位置している。

後期の遺跡は、中期の遺跡とほとんど大差はないが、個々の遺跡において遺構の密度が高い傾向が見られる。また、少数ではあるがこの時期より掘立柱建物跡を伴う集落も存在する。拠点集落は、後期になっても継続されるが、新しくなるに連れて規模を縮小するようである。これらの後期集落のうち、低地内の自然堤防上や微高地上に立地する集落は、後期終末になっていずれも断絶し、その後本庄台地東側縁辺部や残丘縁辺の台地に移動する。これは当地域の低地内に条里形地割りを施工するための計画的な集落移動と推測されている。前期から中期を通じて墓域として意識されてきた残丘上には、後期になって墳丘規模58mの児玉町生野山鈍子塚古墳(菅谷1984)や生野山16号墳(菅谷1984)の首長墓が築造されるが、これらの首長墓は中期の大形円墳に変わって前方後円墳を採用していることは注目されよう。また、後になってこれらの残丘上には生野山古墳群(菅谷他1973)や塚本山古墳群(増田1977)のように群集墳が形成される。当地域の古墳群は、片岩を使用した模様積みの横穴式石室が一般的であり、当地域と近距離にある利根川段丘上の、角閃石安山岩を使用した互目積みの横穴式石室の多い旭・小島古墳群(本庄市1986)や塚合古墳群(菅谷他1969)とは、石室構築技法に明確な差異が見られ、これらとは別系列の集団の墓域であることが考えられる。

### 第三章 川越田遺跡の概要

本遺跡は、女堀川右岸の標高69mを測る自然堤防上に立地する古墳時代の集落跡で、同じ自然堤防上に立地する北東側約200mの後張遺跡や南側約100mの梅沢遺跡とは、遺構の分布が連続する同一遺跡を構成すると考えられている。すでに本遺跡は、昭和56年～57年にかけて児玉工業団地の取付道路建設に伴い、埼玉県埋蔵文化財調査事業団によってA地点が調査されており、古墳時代前期～後期の住居跡29軒、土壙37基、溝跡16条、井戸跡1基が検出されている。

今回のB・C地点の調査は、今井工業団地の取付道路建設に伴う拡幅部分を対象としたもので、南側のB地点で住居跡13軒、土壙3基、溝跡6条及び河川跡が、北側のC地点で住居跡1軒、溝跡2条、性格不明遺構1(SX-1)、黒色土遺物包含層が検出されている。これらの多くはA地点で検出された遺構と関連するものであるが、特に今回新たに確認されたB地点東側の古墳時代の河川跡とC地点中央部の浅い開析谷を掘削したSX-1及び黒色土遺物包含層は、本遺跡が立地する自然堤防周辺の開発や地形変化の様相を知る上で注目されるものである。

住居跡は、A・B・C地点を合わせて、40軒(第15・22号住居跡は欠番)が調査されている。これらの住居跡は、調査区の中央部から西側に集中しており、住居跡同志の重複が著しく、女堀川中流域の自然堤防上に立地する遺跡の一般的な在り方を示している。時期は、古墳時代前期12軒(第5・6・11・18・19・20・24・25・30・32・35・36号住居跡)、中期2軒(第16・42号住居跡)、後期20軒(第1・2・3・4・7・8・10・12・13・14・17・21・28・29・31・33・34・37・38・39号住居跡)、不明6軒(第9・23・26・27・40・41号住居跡)であるが、各時期とも時間差が認められ、時期によって住居数の多寡はあるものの、前期～後期にかけて比較的継続して営まれた集落であったと推測される。

土壙は、A・B地点で40基検出されているが、その性格や時期が明確なもの少ない。土壙の形態は様々であるが、A・B地点とも調査区中央部から西側の住居跡が密集する地域では比較的整った形態のものが散在しているのに対して、A地点の調査区東側では不整形の土壙が南西から北東方向に列状に集中する様子が見られる。このA地点調査区東側に集中する不整形の土壙群は、南側のB地点東側で検出された古墳時代中期～後期の河川跡の縁辺に近く、また古墳時代後期の土器を出土したものの(第28・29・38号土壙)の他に、短脚一段透かしの須恵器高環の脚部(第39号土壙)や勾玉の破片(第23号土壙)を出土したものが、河川跡に関係する祭祀的行為にかかわるものである可能性も考えられる。

溝跡は、A～C地点で18条検出されており、時期は古墳時代前期1条(第7号溝跡)・後期3条(第5・11・16号溝跡)、古代2条(第4・12号溝跡)、中世以降12条(第1・2・3・6・8・9・10・13・14・15・17・18号溝跡)である。古墳時代前期の第7号溝跡は、A地点でその覆土中より多量の土器が出土し、その形態より方形周溝墓の可能性も推測されているが、今回のC地点の調査でもその確証は得られなかった。古墳時代後期の可能性が高いとされる第16号溝跡は、その形態や周辺のピットの状況から、児玉町ミカド遺跡で「祭祀(神事)を執り行う仮り屋のような遺構の跡」(坂本1981)と推定された円形特殊遺構との類似性が指摘されている(富田他1985)。この円形特殊遺構に類似する遺構は、女堀川中流域の古墳時代後期の遺跡である児玉町新宮遺跡D地点(注1)・辻堂遺跡(注2)・浅見境北遺

跡(注3)などでも検出されており、比較的規模の大きな集落に存在するようである。その他の溝跡では、A地点とB地点の調査区東側で検出された中世以前の可能性が高い第12号溝跡が注目される。この第12号溝跡は、本遺跡周辺の水田部に認められる条里形地割りの東西方向の坪線にほぼ一致するもので、C地点の遺構上面を覆っている真間期前半頃の淡黄褐色土層(C地点基本第V層)の形成要因とともに、当地域の条里形地割りの形成が古代に逆上することを推測させるものである。

河川跡は、A・B地点の調査区西端とB地点の調査区東側で検出されているが、調査区西端の河川跡は本遺跡のすぐ西側を流れている現女堀川の改修前の旧流路である。B地点調査区東側の河川跡は、古墳時代中期～後期の期間に存在していたもので、その埋没が集落の廃絶時期とほぼ近時した時期であることは注目されよう。

本遺跡が立地する自然堤防上の集落は、古墳時代前期になってまず本遺跡の川越田地区に出現する。この最初に形成された集落は、比較的小規模な集落と推測されるが、畿内地方や東海西部伊勢湾地方の系譜をもつ土器を多く伴っており、その出自が注目される。その後前期後葉には川越田地区から北東の後張地区まで居住域が拡大し、単なる集落内の人口増加によるものとは思えないほど住居数が増加して大規模集落を形成するようになる。中期の和泉期前半には、さらに本遺跡南側の梅沢地区にまで集落が広がり、自然堤防のほぼ全域に居住域が拡大する。この時期の集落は、他の遺跡に比べて鉄器や砥石を出土する住居跡が多く、また梅沢遺跡C地点(注4)の第37号住居跡では羽口が出土しており、集落内に小鍛冶をもっていたことが推測される。和泉期後半では、他の遺跡と同様にほとんどの住居にカマドが付設されるが、後張地区では住居数がかなり減少し、集落の中心は南側の川越田地区や梅沢地区の方に移動するようである。後期の鬼高Ⅰ期では再び後張地区に集落の中心が移動し、川越田地区や梅沢地区の住居数は減少するが、鬼高Ⅱ期には集落全体の規模が縮小し、川越田地区や梅沢地区に再度住居が集中的に作られる。

このように本遺跡が立地する自然堤防上の集落は、低地内の古墳時代集落の中では比較的早く形成され、その後大規模な集落が後期の鬼高Ⅱ期まで継続して営まれていることや、叩き甕・石剣・鉄製品・古式須恵器等の各時期における特徴的な遺物が他の遺跡に比べて顕著であることなどから見て、女堀川中流域の中心的な集落であったことがわかる。

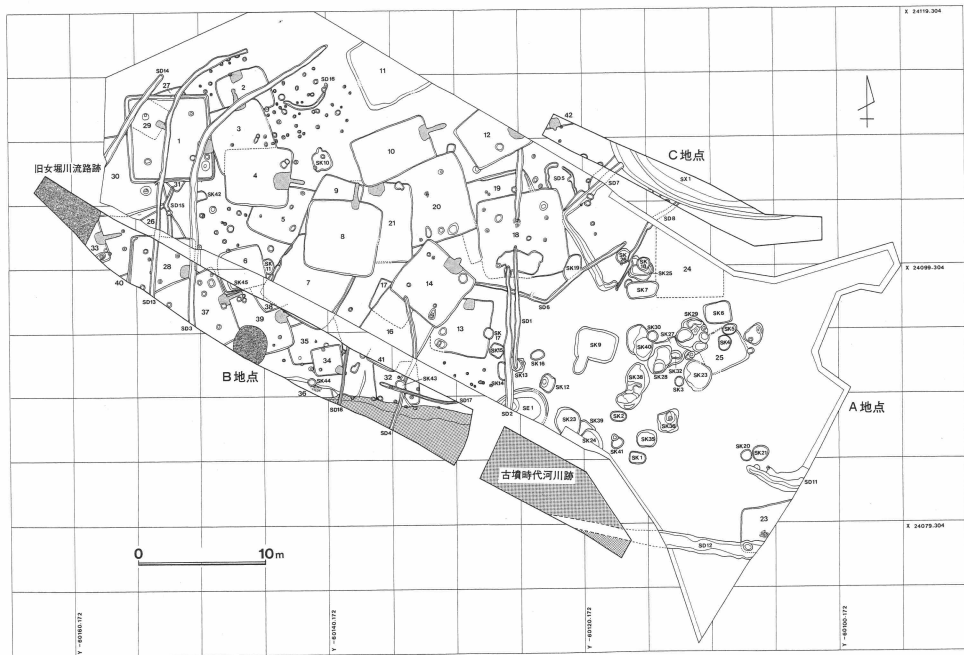
#### 注

(注1) 1991年に児玉町遺跡調査会が工場建設に伴って発掘調査を実施し、縄文時代中期住居跡14軒、古墳時代後期住居跡4軒、奈良・平安時代住居跡4軒等とともに円形周溝遺構1基が検出されている。

(注2) 1990年に児玉町教育委員会が渠営ほ場整備事業(児玉南部地区)とやぼり川改修工事に伴って発掘調査を実施し、古墳時代中期～後期の住居跡57軒等とともに円形周溝遺構1基が検出されている。また、同時に調査した同一遺跡と考えられる南街道遺跡でも同時期の住居跡42軒が調査されている。

(注3) 鷺山古墳の北西側約350mに位置する古墳時代と中世の集落遺跡で、1992年に児玉町教育委員会が渠営ほ場整備事業(児玉南部地区)に伴って発掘調査を実施し、前期～後期の住居跡51軒等とともに円形周溝遺構2基が調査されている。

(注4) 埼玉県埋蔵文化財調査事業団が調査したA・B地点(富田他1985)の渠道を狭んだ反対側を、1987年に児玉町教育委員会が渠営ほ場整備事業(児玉南部地区)に伴って発掘調査を実施し、調査面積が狭いにもかかわらず、中期～後期の住居跡11軒が調査されている。



第3図 川越田遺跡A・B・C地点全測図

# 第Ⅳ章 検出された遺構と遺物

## 第1節 住居跡

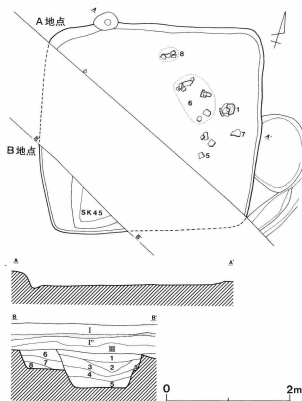
### 第6号住居跡（第4図）

本住居跡は、住居の北東側半分がすでにA地点で調査されている。今回のB地点の調査では、住居の南西コーナー部が検出され、不明確であった本住居跡の形態や規模がほぼ明らかとなった。

平面形は方形を呈し、規模は東西方向3.45m・南北方向3.32mを測る。確認面からの深さは、A地点側で22cm・B地点側で30cmある。住居の主軸方向は不明であるが、東西方向はN-76°-Eをとる。

床面はほぼ平坦をなし、炉や柱穴及び壁溝等の住居内施設はまったく確認されていない。B地点で検出された住居の南西コーナー部の内側は、第45号土壌によって切られている。

出土遺物は、A地点側で五領期の土器(第5図1・2・4・5)と和泉期に下ると考えられる土器(第5図3・6・7・8)が出土している。これらの時間差をもつ土器は、A地点の報告書では「その殆どは床面より高い位置で検出されており、二次的に投棄されたもの」と一括して考えられている。しかし、それらの土器の出土状況を見ると、五領期の土器は床面付近を主体とし、和泉期の土器は覆土の確認面付近を主体としている。このことから、五領期の土器は本住居跡に伴うかそれに近いものと思われ、和泉期の土器は本住居跡が廃絶された後に投棄されたものとして分離できるであろう。本住居跡の時期は、遺物の出土状態より、古墳時代前期(五領期)のものと考えるのが妥当である。



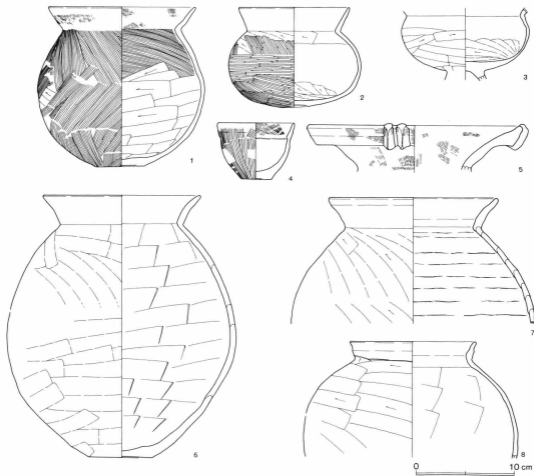
第4図 第6号住居跡

#### 第45号土壌土層説明

- 第1層：褐色土層（焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第2層：暗褐色土層（ローム粒子・焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第3層：暗褐色土層（ロームブロックを微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第4層：茶褐色土層（ロームブロックを多量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第5層：暗茶褐色土層（ローム粒子・ロームブロックを均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）

#### 第6号住居跡土層説明

- 第6層：暗褐色土層（ロームブロックを微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第7層：茶褐色土層（ロームブロックを多量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第8層：暗褐色土層（ローム粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）



第5図 第6号住居跡出土遺物 (富田他1985より)

#### 第7号住居跡 (第6図)

本住居跡も、すでにA地点で住居北側の大半が調査されている。B地点で検出されたのは、本住居跡の南西壁の一部である。本住居跡は多数の住居跡と重複しているが、A地点の第8号住居跡とB地点の第38号住居跡に切れ、A地点の第6号住居跡・第9号住居跡とB地点の第35号住居跡・第39号住居跡を切っている。

平面形は方形を呈し、規模は南西～北東方向5.90m・南東～北西方向は推定で6.20m位を測るものと思われる。確認面からの深さは18cmある。住居の主軸方向は、カマドが住居の北東側壁にあったものと推測されることから、南西～北東方向のN-33°-Eをとると考えられる。

床面は若干起伏があるようで、比較的広範囲に焼土の分布が見られる。壁溝は北西壁下と南東壁下に見られ、B地点側に位置する南東壁下には認められない。

出土遺物は、A地点側の住居東側より、甕・大形甕・小形甕・鉢・環が出土している。本住居跡の時期は、出土遺物より古墳時代後期(鬼高期)と考えられる。



第6図 第7号住居跡

**第7号住居跡土層説明**

第1層：灰褐色土層（ロームブロックを微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第2層：灰褐色土層（ロームブロックを多量に、焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

**第38号住居跡土層説明**

第3層：褐色土層（焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第4層：茶褐色土層（焼土粒子・炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

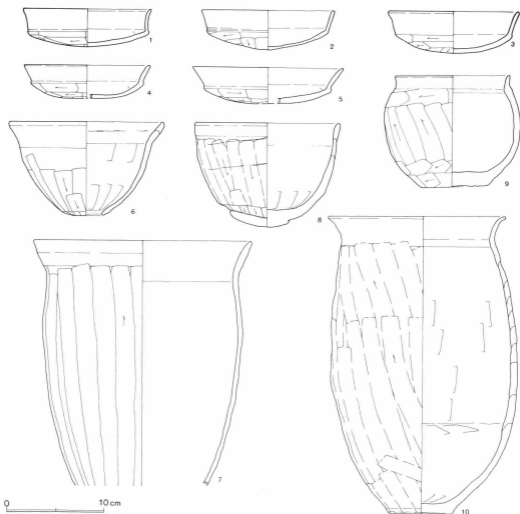
第5層：黒褐色土層（炭化粒子を多量に、焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第6層：褐色土層（ローム粒子・焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第7層：褐色土層（ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第8層：暗褐色土層（焼土粒子・炭化粒子・ロームブロックを微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）





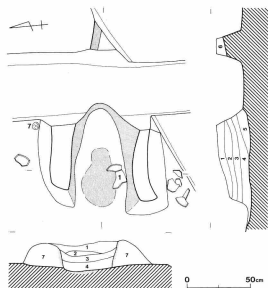
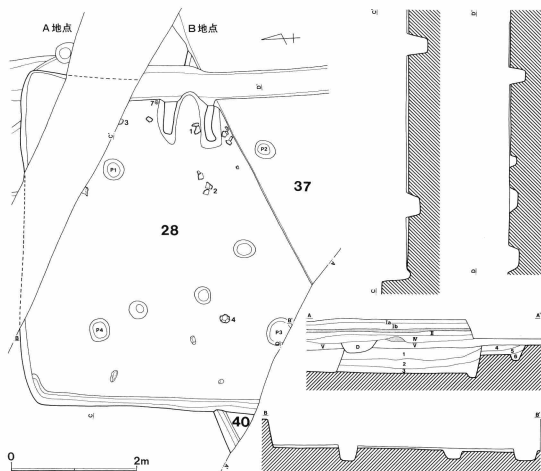
第7図 第7号住居跡出土遺物（富田他1985より）

#### 第28号住居跡（第8図）

本住居跡は、A地点の調査で住居の北東コーナー部が検出されていたが、今回のB地点の調査で住居跡の大半が検出され、不明確であった本住居跡の形態や規模と時期がほぼ明らかとなった。本住居跡も多数の住居跡と重複しており、A地点で第26号住居跡を、B地点で第40号住居跡を切り、B地点で第37号住居跡と中世の第3号溝跡に切られている。

平面形は、住居の南東側を第37号住居跡に切られているため全容は不明であるが、比較的整った方形を呈すものと思われる。規模は、東西方向5.20m・南北方向は4.65mまで測れる。主軸方位はN-95°-Eをとる。

床面は上下2面確認され、最初の床面の上3～4cmに新しい床が貼り直されている。上下の床面とも比較的平坦で、全体的に非常に堅緻である。この上下の床面は、カマドや柱穴の位置が同じであり、また住居の拡張も認められないことから、建て直しによるものではなく、単なる床の貼り直



#### 第28号住居跡カマド土層説明

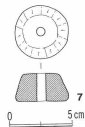
- 第1層：暗灰褐色土層（ロームブロック・ローム粒子・焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりはない。）
- 第2層：暗黄褐色土層（ローム粒子・ロームブロックを均一に、焼土ブロックを微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第3層：暗赤褐色土層（焼土ブロックを多量含む。粘性に富み、しまりはない。）
- 第4層：黒灰色土層（炭化粒子を多量に、焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりはない。）
- 第5層：暗赤褐色土層（焼土ブロックを多量含む。粘性に富み、しまりはない。）
- 第6層：暗灰褐色土層（焼土粒子を均一に、ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第7層：黄褐色土層（ロームブロックを多量に含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第8図 第28・40号住居跡

しと考えられる。主柱穴は、ピットの形態・規模・位置等からP1～P4の4本主柱穴と考えられる。貯蔵穴は調査区内では確認されていない。壁溝は、住居の西壁下のみに見られる。

カマドは、東側壁のほぼ中央に位置し、煙道部を第3号溝跡と第37号住居跡に切られている。規模は、最大幅 100cmを測る。袖は比較的太くしっかりしており、ロームブロックを主体とする黄褐色土を盛り上げて作っている。燃焼部は床面を若干掘りくぼめて平坦に作られており、底面は良く焼けている。燃焼部・煙道部内面は、非常に良く焼けて赤色化している。

出土遺物は、甕(1)・大形甕(2)・坏(3・4)・ミニチュア(5)・土製支脚(6)・土製紡錘車(7)などが、カマド内やカマド周辺の床面付近から出土している。これらのうち土器は、完形品はなく、すべて破片である。本住居跡の時期は、古墳時代後期(鬼高期)である。



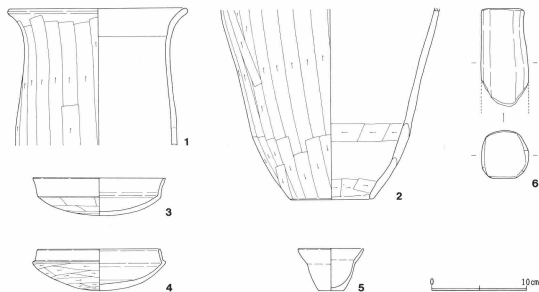
第9図 第28号住居跡出土土製紡錘車

#### 第28号住居跡土層説明

- 第1層：暗灰褐色土層(鉄銹・ローム粒子・焼土粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。)  
 第2層：暗灰褐色土層(ロームブロックを均一に、焼土粒子・炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。)  
 第3層：暗灰色土層(ローム粒子を均一に、焼土粒子・炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。)

#### 第40号住居跡土層説明

- 第4層：黒灰色土層(ローム粒子・焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。)  
 第5層：暗灰褐色土層(ローム粒子を均一に、焼土粒子・炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。)  
 第6層：暗黄褐色土層(ローム粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。)



第10図 第28号住居跡出土遺物

第28号住居跡出土遺物観察表

No	器種	法量	形態・成形手法的特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	甕	口縁部径 (19.2cm)	粘土紐積み上げ成形。口縁部は緩やかに外反する。胴部はあまり張らない。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。	片岩粒・赤色粒 白色粒・黒色粒 内外-淡褐色	約1/4。
2	大形甕	底部径 8.8cm	粘土紐積み上げ成形。胴部はあまり張らず、底部は若干すばまる。	胴部外面ケズリ、胴部内面ナデ。底部穿孔部内面ケズリ。	片岩粒・赤色粒 白色粒 内外-茶褐色	約3/4。
3	環	口縁部径 (14.0cm) 器高 4.0cm	口縁部は緩やかに外反し、口唇部は尖る。体部は内湾しながら開き、底部は浅い丸底を呈する。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。	赤色粒・白色粒  内外-淡茶褐色	約1/2。  器表面磨減顕著。
4	環	口縁部径 (13.0cm) 器高 4.4cm	口縁部は直線的に内傾し、口唇部は若干肥厚する。体部は内湾しながら開き、底部は丸底を呈する。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。	赤色粒・白色粒  内外-茶褐色	約3/4。  外面に黒斑あり。
5	ミニチュア	口径(7.0) 器高 4.5 底径 2.6	口縁部は短く内湾ぎみに開く。胴部は張らず、底部は平底を呈する。	内外面ともナデ。	片岩粒・赤色粒 白色粒 内外-暗褐色	約1/3。
6	土製支脚	最大径 5.0 残存高 10.4	太い棒状を呈し、上端に向かって若干すばまる。断面はやや角張った円形を呈す。	上端部及び側面ナデ。	白色粒  外-暗茶褐色	約2/3。
7	土製紡錘車	最大径 2.7 高さ 2.2 重量 42g	側面は比較的整った台形を呈し、穿孔は中心に片側より垂直に施されている。	上下平坦部ナデ。側面ケズリの後ナデ。	片岩粒・赤色粒 白色粒 外-橙褐色	完形。 黒斑あり。

## 第32号住居跡 (第12図)

本住居跡は、B地点の調査区東側に位置する。住居中央部を第4号溝跡・第7号溝跡や第43号土壇に切られ、住居北側壁を第41号住居跡、南側壁を古墳時代の河川跡によって切られている。住居跡の遺存状態はあまり良好とは言えない。

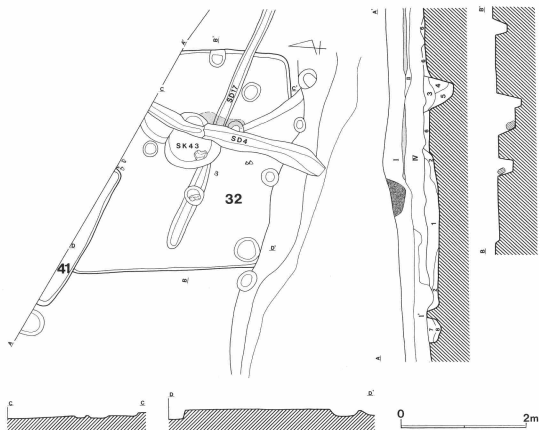
平面形は比較的整った方形を呈するものと思われ、規模は東西方向3.50m・南北方向は3.40mまで測れる。確認面からの深さは5cm前後である。主軸方位は、N-83°-Eをとる。

床面は、全体的に平坦で堅緻である。炉は、住居中央部の南東寄りに位置する。形態は第43号土壇や溝によって切られているため不明であるが、掘り込みをもたず、ただ床面が焼けているだけの地床炉である。住居内よりピットが7箇所検出されているが、本住居跡に伴うものはない。壁溝は、調査区内で検出された壁下には見られない。

出土遺物は、土器片が多く出土しているが、器形の全容がわかるものはない。第11図に図示した土器は、器表面にタキの痕跡が見られるものである。本住居跡の時期は、出土遺物より、古墳時代前期(五領期)と考えられる。



第11図 第32号住居跡出土遺物



第12図 第32号住居跡

#### 第41号住居跡土層説明

第1層：暗褐色土層（ローム粒子を均一に、焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第2層：暗茶褐色土層（ロームブロックを微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

#### 第4号溝跡土層説明

第3層：暗褐色土層（ローム粒子・焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第4層：暗褐色土層（ローム粒子を均一に、焼土粒子・炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第5層：暗茶褐色土層（ロームブロックを均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）

#### 第32号住居跡土層説明

第6層：暗褐色土層（ローム粒子・焼土粒子を均一に、ロームブロック・炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

#### 第32号住居跡出土土器観察表

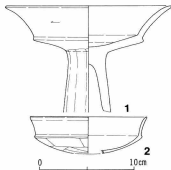
No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	甕	底部径 5.4cm	粘土紐積み上げ成形。底部は輪台状を呈する。	外面右上がりのタタキの後ハケ、内面ナデ。	片岩粒・白色粒 外-暗茶褐色 内-淡褐色	底部1/2。
2	甕			外面右上がりのタタキ、内面匏ナデ。	片岩粒・白色粒 内外-暗褐色	破片。外面に靱正痕。

### 第33号住居跡土層説明

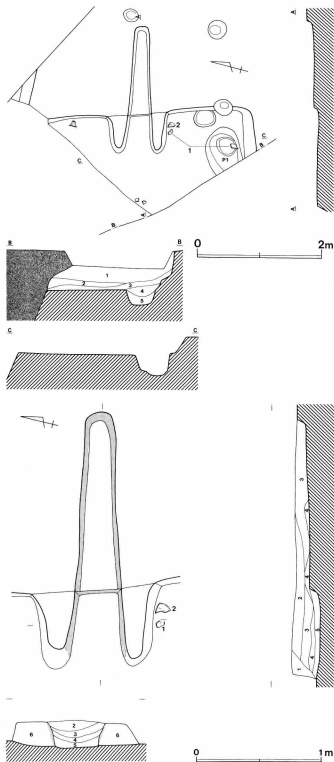
- 第1層：暗茶褐色土層（ローム粒子・鉄斑を均一に、焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）  
 第2層：暗灰褐色土層（鉄斑を均一に、ローム粒子・焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）  
 第3層：暗灰褐色土層（鉄斑・焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）  
 第4層：暗灰色土層（ローム粒子を均一に、焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）  
 第5層：暗灰褐色土層（ロームブロック・焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

### 第33号住居跡カマド土層説明

- 第1層：暗茶褐色土層（ローム粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）  
 第2層：暗灰褐色土層（焼土粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）  
 第3層：暗灰褐色土層（ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）  
 第4層：暗赤褐色土層（焼土ブロックを多量含む。粘性に富み、しまりを有する。）  
 第5層：暗茶褐色土層（焼土ブロック・炭化粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりはない。）  
 第6層：暗黄褐色土層（ロームブロックを多量含む。粘性に富み、しまりを有する。）



第14図 第33号住居跡出土遺物



第13図 第33号住居跡

### 第33号住居跡（第13図）

本住居跡は、B地点の調査区北側に位置する。調査区内では住居の一部が検出されただけであるが、住居跡の西側を女堀川の旧河川跡によって切られている。

住居跡の一部しか検出されていないため、平面形や規模は不明である。確認面からの深さは25cm前後を測る。主軸方位は、カマドの位置からN-74°-Eをとるものと考えられる。

床面は全体的に平坦で、比較的堅緻である。壁溝は調査区内で検出された壁下には見られない。住居に伴うピットは、住居の南東コーナー部付近に位置するP1だけである。P1は、2段に深くなっており、床面からの深さは34cmを測る。

カマドは、住居の東側壁に位置し、壁に対してほぼ直角に付設されている。規模は、全長200cm・最大幅92cmを測る。袖は、ロームブロックを主体とする暗黄褐色土を盛り上げて構築したもので、比較的太くしっかりしている。燃焼部は、住居の壁を掘り込まないもので、燃焼面は床面とほぼ同じである。内面は良く焼けて赤色化している。煙道部は、燃焼部より一段高く、ほぼ水平に住居外へ延びている。

出土遺物は、比較的少ないが、カマド周辺の床面上より高環(1)や環(2)等の土器片が数点出土している。本住居跡の時期は、古墳時代後期(鬼高期)である。

第33号住居跡出土土器観察表

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	高環	口縁部径 17.6cm	口縁部は緩やかに外反する。脚部はあまり膨らまない。	口縁部内外面ヨコナデ。環部内外面ナデ。脚部外面ケズリの後ナデ、内面ナデ。	赤色粒・白色粒 内外-淡橙褐色	1/2。
2	環	口縁部径 (12.4cm) 器高 (4.0cm)	口縁部は緩やかに外反し、口唇部は尖る。体部は内湾しながら開き、底部は浅い丸底を呈する。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。	赤色粒・白色粒 内外-淡橙褐色	口縁部1/3。 器表面磨減顕著。

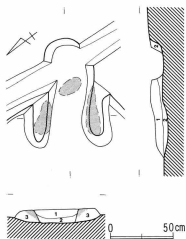
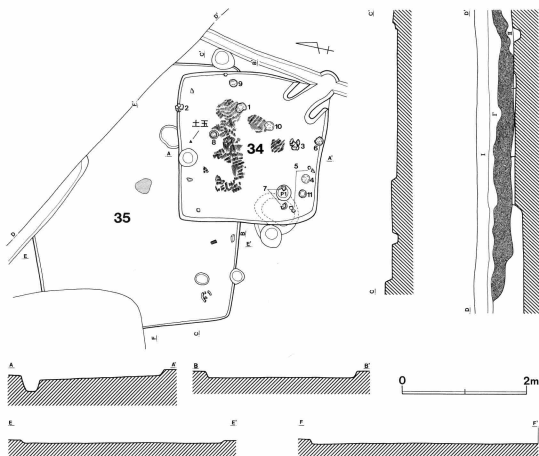
### 第34号住居跡（第15図）

本住居跡は、B地点の調査区中央部に位置する。重複する第35号住居跡を切り、カマドの一部を後世の溝によって切られている。住居跡の上面は近年の削平を受けており、遺存状態はあまり良好とは言えない。

平面形は、比較的整った方形を呈する。規模は、東西方向2.36m・南北方向2.38mを測り、かなり小形の住居である。確認面からの深さは10cm前後ある。主軸方位は、N-82°-Eをとる。

床面は、全体的に平坦で比較的堅緻である。住居中央部では、比較的広範囲から藁状の炭化物が薄く床面に密着した状態で検出されている。ピットは住居内より2箇所検出されているが、本住居跡に伴うものはP1だけである。壁溝は各壁下とも存在しない。

カマドは、住居の南東コーナー部に、壁を若干掘り込んで付設されている。規模は、全長86cm・最大幅67cmを測る。袖は、ロームブロックを主体とする暗黄褐色土を盛り上げて構築している。燃焼部は、床面を若干掘りくぼめて燃焼面としており、内面は良く焼けている。煙道部は、すでに削



#### 第35号住居跡土層説明

第1層：暗灰褐色土層（ローム粒子・焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

#### 第34号住居跡カマド土層説明

第1層：暗赤褐色土層（焼土粒子を多量含む。粘性・しまりともない。）

第2層：暗褐色土層（ローム粒子を均一に、焼土粒子・炭化粒子を微量含む。粘性・しまりともない。）

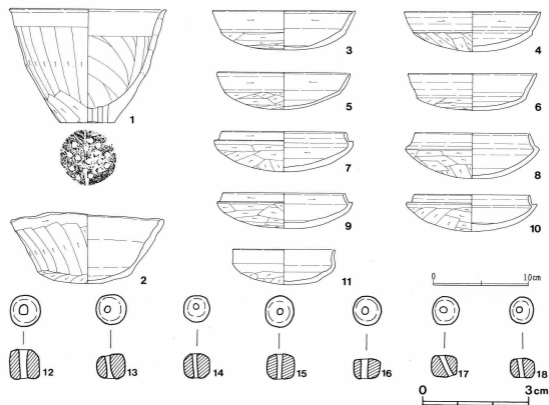
第3層：暗黄褐色土層（ロームブロックを多量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第15図 第34・35号住居跡



平されているため不明である。

出土遺物は、住居の床面上より小形多孔甕(1)・鉢(2)・环(3~11)などの完形の土器が比較的多く出土しており、土器以外では住居北側中央の壁際より、土製の小玉が7個まとまって出土している。本住居跡の時期は、古墳時代後期(鬼高期)である。



第16図 第34号住居跡出土遺物

第34号住居跡出土土器観察表

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土色調	備考
1	小形甕	口径 (16.4) 器高 12.0 底径 5.6	粘土細積み上げ成形。口縁部は胴部より内湾ぎみに開き、口唇部は短く開く。底部は厚く、多孔を有する。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面裏ナデ。	片岩粒・赤色粒 白色粒 内外-明茶褐色	約1/2。  底部外面に木葉痕あり。
2	鉢	口径 16.0 器高 7.4 底径 9.9	粘土細積み上げ成形。口縁部は体部より直線的に開き、底部は浅い丸底を呈する。	口縁部外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。底部外面ケズリ、内面ナデ。	片岩粒・赤色粒 白色粒 内外-淡茶褐色	3/4。 外面の一部は二次焼成を受けて白色化。
3	环	口径 15.0 器高 4.1	口縁部は直線的に外傾する。体部は浅く、底部は丸底を呈する。	口縁部内外面及び体部内面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。	赤色粒・白色粒 内外-暗茶褐色	ほぼ完形。
4	环	口縁部径 14.3cm 器高 4.2cm	口縁部は直線的に外傾し、口唇部内面は凹線状に窪む。体部は浅く、底部は丸底を呈する。	口縁部内外面及び体部内面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。	片岩粒・白色粒 赤色粒 内外-明茶褐色	完形。 底部外面に黒斑あり。

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
5	坏	口径 14.0 器高 3.9	口縁部はやや内湾ぎみに外傾する。体部は浅く、底部は丸底を呈する。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。	小石・白色粒 赤色粒 内外-茶褐色	1/2。 外面に黒斑あり。
6	坏	口径 13.6 器高 3.9	口縁部はやや蛇行ぎみに外傾する。体部は浅く、底部は丸底ぎみである。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。	片岩粒・赤色粒 白色粒 内外-赤茶褐色	ほぼ完形。
7	坏	口縁部径 (13.2cm) 器高 4.2cm	口縁部は短く直線的に内傾し、口唇部は肥厚する。体部は浅く、底部は丸底を呈する。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。	赤色粒・白色粒  内外-明茶褐色	3/4。
8	坏	口径 12.0 器高 4.8	口縁部は直線的に内傾し、体部は浅く、底部は丸底を呈する。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。	片岩粒・赤色粒  内外-暗褐色	完形。 底部外面に黒斑あり。
9	坏	口径 12.5 器高 3.8	口縁部は短く内傾し、口唇部は肥厚する。体部は浅く、底部は丸底を呈する。	口縁部内外面及び体部内面ヨコナデ。体部外面ケズリ。	赤色粒・白色粒  内外-暗茶褐色	ほぼ完形。 底部外面に黒斑あり。
10	坏	口径 12.0 器高 3.9	口縁部は短く内傾し、口唇部は肥厚する。体部は浅く、底部は丸底を呈する。	口縁部内外面及び体部内面ヨコナデ。体部外面ケズリ。	赤色粒・白色粒 黒色粒 内外-暗茶褐色	ほぼ完形。
11	坏	口径 10.8 器高 3.7	口縁部は外反ぎみに直立する。体部は浅く、底部は丸底ぎみである。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。	赤色粒・白色粒 黒色粒 内外-茶褐色	ほぼ完形。

### 第35号住居跡 (第15図)

本住居跡は、B地点の調査区中央部に位置し、重複する古墳時代後期の第7号住居跡・第34号住居跡・第39号住居跡に切られている。住居の床面近くまで攪乱による削平を受けており、遺存状態は劣悪である。

平面形は、住居跡の北東側が調査区外に位置するため全容は不明であるが、調査区内で検出された部分から推測すると、東側壁に比べて西側壁がやや短い台形ぎみの長方形を呈するものと思われる。確認面からの深さは、最高で5cmある。規模は、東西方向4.10m・南北方向3.28mを測る。主軸方位は、N-77°-Eをとる。

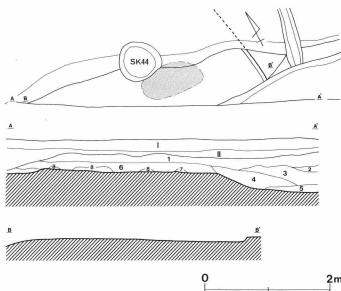
床面は、全体に平坦をなし、比較的堅緻である。主柱穴や壁溝などの施設は見られない。炉は、住居中央部に位置し、掘り込みをもたない単に床面が焼けているだけの地床炉である。

出土遺物は、少量の土器片が出土しただけである。本住居跡の時期は、住居の形態や出土遺物より、古墳時代前期(五領期)のものと考えられる。

### 第36号住居跡 (第17図)

本住居跡は、B地点の調査区中央部に位置する。住居跡の北側は攪乱により削平され、南側は古墳時代の河川跡に切られており、遺存状態は劣悪である。また、住居跡の中央部を古墳時代前期の第44号土壌によって切られている。

調査区内で検出されたのは、住居跡のごく一部であるため、住居跡の全容は不明である。床面は、



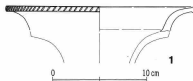
第17図 第36号住居跡

平坦で比較的堅緻である。炉は、住居中央部のやや東寄りに位置する。掘り込みをもたない単に床面が焼けただけの地床炉である。

出土遺物は、少量の土器片が出土しただけであるが、いわゆる「伊勢型二重口縁壺」に類似する壺の破片(Na 1)が出土している。本住居跡の時期は、住居跡の形態や出土遺物より、古墳時代前期(五領期)のものと思われる。

#### 第36号住居跡土層説明

- 第1～5層：(河川跡覆土。)  
 第6層：暗灰褐色土層（マンガン塊・鉄斑を均一に、焼土粒子・ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまり有する。）  
 第7層：暗赤褐色土層（焼土ブロック。）  
 第8層：暗黄褐色土層（ローム粒子を均一に含む。粘性に富み、しまり有する。）



第18図 第36号住居跡出土遺物

#### 第36号住居跡出土土器観察表

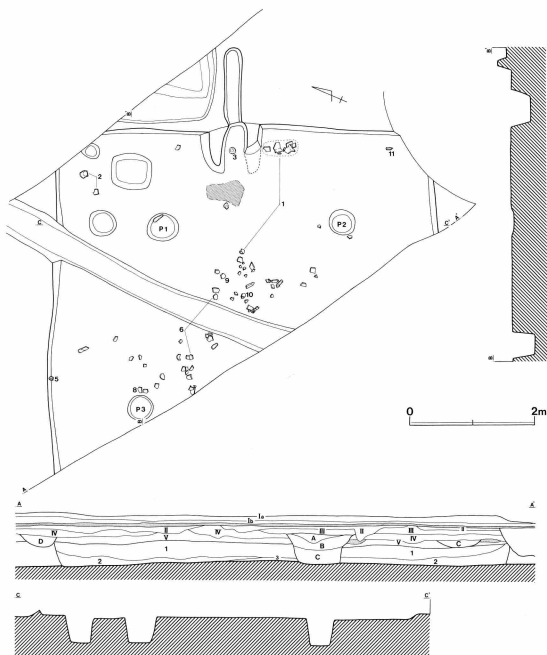
No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	壺	口縁部径 (19.8cm)	粘土紐積み上げ成形。口縁部は二重口縁と思われる。口唇部は平坦な面をもち、上下にやや肥厚する。	口縁部内外面ヨコナデ。口唇部に木口状工具による刺突文を巡らせる。	赤色粒・白色粒  内外・淡茶褐色	口縁部1/4。  内面に黒斑あり。

#### 第37号住居跡 (第19図)

本住居跡は、B地点の調査区中央部のやや北寄りに位置する。重複する第28号住居跡と第39号住居跡を切り、住居中央部を中世の第3号溝跡によって切られている。遺構の遺存状態は、比較的良好である。

平面形は、住居の南西側半分が調査区外であるため全容は不明であるが、調査区内で検出された部分や支柱穴の配置から推測すると一辺6m位の方形を呈するものと思われる。規模は、北西～南東方向5.95m・北東～南西方向は5.40mまで測れる。確認面からの深さは、最高で32cmある。主軸方位は、N-65°-Eをとる。

床面は、全体的に平坦で、住居中央部は比較的堅緻である。カマド炊口部の前の床面上には炭化粒の分布が見られる。支柱穴は、4本支柱と考えられ、調査区内ではP1～P3の3箇所が検出さ



第19図 第37号住居跡

**第37号住居跡土層説明**

第1層：暗茶褐色土層（鉄斑・ローム粒子を均一に、焼土粒子・炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第2層：暗灰褐色土層（鉄斑・焼土粒子・炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりはない。）

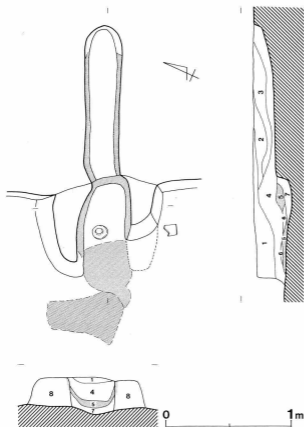
第3層：暗灰色土層（炭化粒子を多量含む。粘性に富み、しまりはない。）

**第3・13号溝跡土層説明**

第A層：暗茶灰褐色土層（鉄斑を多量に、B軽石・炭化粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第B層：暗茶灰褐色土層（B軽石・炭化粒子を均一に、焼土粒子・ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第C層：暗灰褐色土層（B軽石・炭化粒子・焼土粒子・鉄斑を均一に含む。粘性に富み、しまりはない。）



第20図 第37号住居跡カマド

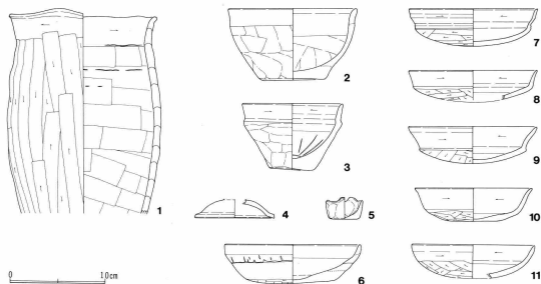
#### 第37号住居跡カマド土層説明

- 第1層：茶褐色土層（ロームブロックを多量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第2層：茶褐色土層（焼土ブロックを均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第3層：暗茶褐色土層（ローム粒子・焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第4層：暗茶褐色土層（焼土ブロックを微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第5層：赤褐色土層（焼土ブロック・焼土粒子を多量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第6層：黒褐色土層（炭化粒子を多量含む。粘性に富み、しまりはない。）
- 第7層：暗茶褐色土層（ローム粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第8層：暗黄褐色土層（ロームブロックを多量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

れている。いずれも直径20cm～30cmの円形を呈し、床面からの深さは35cm～40cmを測り、類似した形態を呈している。貯蔵穴は、カマド左側の住居北側コーナー部付近に位置する。64cm×58cmの長方形を呈し、底面は平坦で床面からの深さは31cmある。壁溝は、調査区内で検出された各壁下には見られない。

カマドは、住居北東壁の中央に位置し、壁に対してほぼ直角に付設されている。規模は、全長2m・最大幅1mを測る。袖は、比較的太くしっかりしており、ロームブロックを主体とする暗黄褐色土を盛り上げて構築している。右側袖の先端部は、すでに中世のピットによって切られており、残存していない。燃焼部は、壁を掘り込まない形態で、燃焼面は床面とほぼ同じである。内面は良く焼けており、中央部には№3の小形鉢を伏せて支脚に転用している。煙道部は、燃焼部より一段高く、住居外にほぼ水平に延びている。

出土遺物は、土器片が比較的多く出土しているが、完形品は少ない。このうちの№1・2・3・11は、カマド周辺や住居コーナー付近の床面上より出土し、本住居跡に伴うと考えられるものであるが、他は住居中央部の覆土中より出土しており、住居廃絶後に投棄されたものと思われる。本住居跡の時期は、古墳時代後期(鬼高期)のものである。



第21図 第37号住居跡出土遺物

第37号住居跡出土遺物観察表

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	甕	口縁部径 15.5cm	粘土紐輪積み成形。口縁部は直立ぎみに弱く外反する。胴部はあまり張らない。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面篋ナデ。	片岩粒・赤色粒 白色粒 内外-暗茶褐色	3/4。 外面に黒斑あり。
2	鉢	口径 13.6 器高 7.7 底径 6.4	粘土紐積み上げ成形。体部は内湾しながら開き、口縁部は直立ぎみに短く外反する。底部は平底を呈する。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデ、内面篋ナデ。底部外面ナデ。	片岩粒・赤色粒 白色粒 内外-暗茶褐色	ほぼ完形。 外面に黒斑あり。
3	環	口径 10.6 器高 7.1 底径 4.7	粘土紐積み上げ成形。口縁部は直線的にやや外傾する。体部は深く、底部は厚い平底を呈する。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデ、内面篋ナデ。底部外面ナデ。	赤色粒・白色粒 内外-暗茶褐色	完形。 カマド内で支脚として再利用。
4	蓋	口縁部径 (8.4cm)	天井部は丸みをもち、口縁部は短く横に開く。口唇部は平坦な面をもつ。	内外面ナデ。	赤色粒・白色粒 内外-明茶褐色	1/4。 内外面に黒斑あり。
5	ミニチュア	口径 3.9 器高 2.3 底径 3.2	手捏成形。口縁部は未調整で整っていない。底部は薄く、平底を呈する。	体部外面ナデ、内面指ナデ。底部外面ナデ。	赤色粒・白色粒 内外-淡褐色	完形。
6	環	口径 14.4 器高 4.1 底径 9.4	粘土紐輪積み成形。口縁部は短く直立し、体部は直線的に開く。底部は平底ぎみ。	口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面ナデ。底部外面ケズリ。	片岩粒・赤色粒 白色粒 内外-淡茶褐色	4/5。
7	環	口縁部径 (13.6cm) 器高 4.0cm	口縁部は屈曲して外傾し、口唇部内面に平坦な面をもつ。体部は浅く、底部は丸底を呈する。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。	白色粒・黒色粒 内外-淡茶褐色	1/4。
8	環	口縁部径 (13.6cm)	口縁部はやや弱く外反する。体部は浅く、底部は丸底を呈する。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ。内面ナデ。	赤色粒・白色粒 内外-茶褐色	口縁部1/4。

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
9	坏	口径 (13.6) 器高 3.9	口縁部は緩やかに外反する。体部は浅く、底部は丸底を呈する。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ。内面ナデ。	赤色粒・白色粒 内外-茶褐色	1/4。
10	坏	口径 (12.4) 器高 3.5	口縁部は緩やかに外反する。体部は浅く、底部は平底ぎみである。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ。内面ナデ。	赤色粒・白色粒 片岩粒 内外-茶褐色	1/3。
11	坏	口縁部径 (13.0cm) 器高 (3.6cm)	口縁部は内湾ぎみに開く。体部は浅く、口縁部との境に明確な稜をもたない。底部は丸底を呈する。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ。内面ナデ。	赤色粒・白色粒 内外-茶褐色	口縁部1/4。

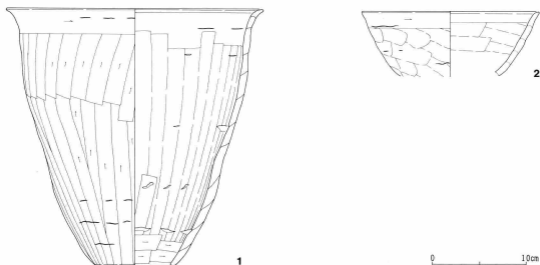
### 第38号住居跡 (第6図)

本住居跡は、B地点の調査区中央部に位置する。重複する第7号住居跡と第39号住居跡を切っているが、A地点では確認されていない住居である。調査区内では住居の南側コーナ部付近しか検出されていないため、住居跡の全容は不明である。床面はほぼ平坦で、確認面からの深さは12cmある。出土遺物は、土器片が少量出土しただけである。本住居跡の時期は、出土土器や住居の重複関係より、古墳時代後期(鬼高期)のものと考えられる。

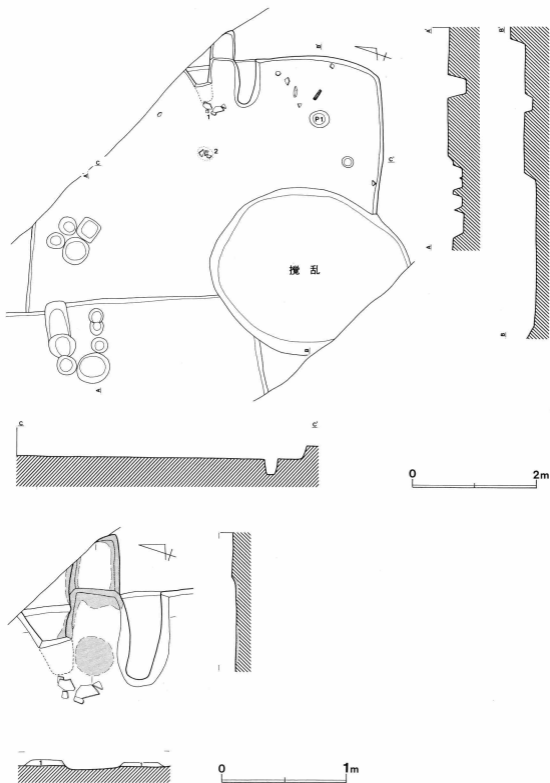
### 第39号住居跡 (第23図)

本住居跡は、B地点の調査区中央部に位置する。住居の西側を第37号住居跡に、北側を第7号住居跡と第38号住居跡に、両側を攪乱によって切られているため、本住居跡の全容は不明である。

平面形は不明であるが、調査区内で検出された部分から推測すると、比較的整った方形もしくは長方形を呈するものと思われる。規模は、北西～南東方向5.43m・北東～南西方向は5.30mまで測



第22図 第39号住居跡出土遺物



第23図 第39号住居跡



れる。確認面からの深さは、20cm～30cmある。主軸方位は、N-72°-Eをとる。

床面は、全体的に平坦で、住居中央部は比較的堅緻である。主柱穴と思われるピットは、住居の東側より1箇所検出されている。直径30cmの円形を呈し、床面からの深さは12cmを測る。

カマドは、住居の北東側壁の中央部に位置し、壁に対してほぼ直角に付設されている。規模は、全長1.24m・最大幅1.16mを測る。袖は、遺存状態が良好ではないが、比較的太くしっかりしており、ロームブロックを主体とする暗黄褐色土を盛り上げて構築している。左側袖の先端部は、すでに崩壊している。燃烧部は、壁を掘り込まない形態で、燃烧面は床面とほぼ同じであり、内面は比較的良く焼けている。煙道部は、燃烧部より若干高く、住居外にほぼ水平に短く延びている。

出土遺物は、覆土中より土器片が少量出土しているが、完形品はない。本住居跡の時期は、住居跡の形態や出土土器より古墳時代後期(鬼高期)のものと考えられる。

第39号住居跡出土遺物観察表

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	大形甕	口径(27.0) 器高(27.1) 底径 8.4	粘土紐積み上げ成形。口縁部は緩やかに外反し、胴部は開く。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面匏ナデ。底部内面ケズリ。	赤色粒・白色粒 内外-茶褐色	1/5。
2	鉢	口縁部径(18.6cm)	粘土紐積み上げ成形。口縁部は体部より連続して内湾ぎみに開く。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデ、内面匏ナデ。	片岩粒・白色粒 内外-茶褐色	口縁部1/4。

#### 第40号住居跡(第8図)

本住居跡は、B地点の調査区北側に位置し、住居跡の東側を第28号住居跡に切られている。調査区内で検出されたのは住居の北西側壁のごく一部だけであるため、住居跡の明細は不明である。

床面はほぼ平坦をなし、北西側壁下には壁溝をもつ。確認面からの深さは、約15cmを測る。出土遺物はなく、本住居跡の時期は不明である。

#### 第41号住居跡(第12図)

本住居跡は、B地点の調査区中央部のやや南側に位置し、重複する第32号住居跡を切っている。調査区内で検出されたのは住居の南西側壁だけであるため、住居跡の全容は不明である。北側に隣接するA地点側では、古墳時代後期の第17号住居跡よりも古いと推測されている第16号住居跡が検出されており、本住居跡はその第16号住居跡に切られている可能性も考えられる。

規模は、北西～南東方向2.48mを測り、比較的小形の住居跡と思われる。床面は、やや起伏があり、壁際であるためやや軟弱である。調査区内で検出された住居の南西側壁下には、壁溝は見られない。確認面からの深さは、約10cmを測る。

出土遺物は、土器片が数片出土しただけである。本住居跡の時期は明確にできなかったが、住居跡の重複関係からは、古墳時代前期の第32号住居跡よりも新しく、後期の第17号住居跡よりも古いものと考えられる。

## 第42号住居跡（第24図）

本住居跡は、C地点の調査区西端に位置する。調査区内で検出されたのは住居跡の南側壁の一部とカマドだけであり、住居跡の大部分は調査区外であるため、本住居跡の全容は不明である。

住居の主軸方位は、南側壁の方向とカマドの位置から $N-169^{\circ}-E$ をとると考えられる。床面は、全体的に平坦で比較的堅緻である。床面上には多量の焼土と炭化粒子が薄く被覆しており（第3層）、またカマド東側には床面が焼けて赤色化している部分が見られることから、本住居跡は火災により焼失した可能性が高い。

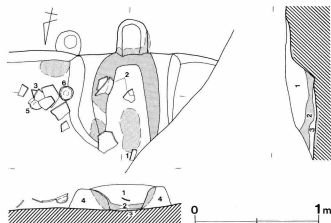
カマドは、住居の南側壁に位置し、壁に対してほぼ直角に付設されている。規模は、全長104cm・最大幅85cmを測る。袖は、ロームブロックを主体とする暗黄褐色土を盛り上げて構築している。燃燒部は、壁を掘り込まない形態で、燃燒面は床面とほぼ同じである。内面は非常に良く焼けて赤色化している。煙道部は、すでに大部分は削平されているが、住居外に約25cm程残存している。燃燒部よりも一段高く、ほぼ水平に延びるようである。

出土遺物は、カマド内及びその周辺の床面上より、壺（1）・甕（2・3）・坏（4～6）などの土器が比較的まとまって出土している。本住居跡の時期は、それらの出土土器より古墳時代中期後半頃のものと考えられる。



### 第42号住居跡土層説明

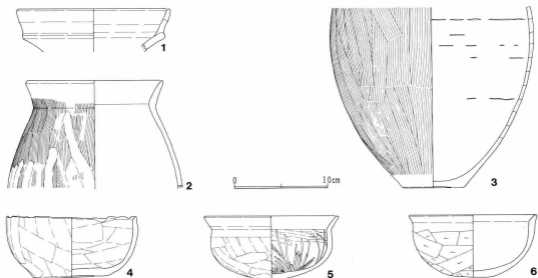
- 第Ⅰ層：淡灰色土層（現水田層。下部に田床を伴う。）
- 第Ⅰ'層：淡灰色土層（旧水田層。A軽石を含む。）
- 第Ⅲ層：暗灰褐色土層（中世水田層。B軽石を多量含む。）
- 第Ⅴ層：淡黄褐色土層（ローム土主体の二次堆積土。）
- 第1層：淡褐色土層（ローム粒子を均一に、焼土粒子・炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第2層：暗褐色土層（ローム粒子を均一に、焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第3層：暗褐色土層（焼土ブロック・炭化粒子を多量含む。粘性に富み、しまりを有する。）



### 第42号住居跡カマド土層説明

- 第1層：暗灰褐色土層（ローム粒子を均一に、焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第2層：暗赤褐色土層（焼土層。）
- 第3層：暗灰色土層（炭化粒子を均一に、焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第4層：暗黄褐色土層（ロームブロックを均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第24図 第42号住居跡



第25図 第42号住居跡出土遺物

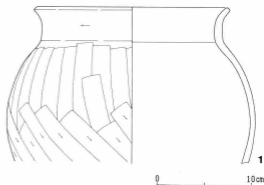
第42号住居跡出土遺物観察表

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	壺	口縁部径 (16.2cm)	粘土紐積み上げ成形。口縁部は二重口縁を呈する。	口縁部内外面ヨコナデ。	白色粒・赤色粒 内外-茶褐色	口縁部1/5。
2	甕	口縁部径 (14.4cm)	粘土紐積み上げ成形。口縁部は緩やかに外反し、胴部は張る。	口縁部内外面ナデ。胴部外面ハケの後雑なナデ、内面ナデ。	白色粒・赤色粒 内外-淡褐色	約1/2。
3	甕	底部径 6.4cm	粘土紐積み上げ成形。胴部は長胴ぎみで、底部は突出せず、平底を呈する。	胴部外面ハケ、内面ナデ。 底部内外面ナデ。	赤色粒・白色粒 外-淡茶褐色 内-淡褐色	約1/2。 外面に煤の付着あり。
4	坏	口径 13.6 器高 6.6 底径 8.0	粘土紐積み上げ成形。口縁部は体部より内湾ぎみに立ち上がる。底部はやや大きく、平底を呈する。	口縁部及び体部内外面ともナデ。底部外面ナデ。	赤色粒・白色粒 内外-明茶褐色	完形。 比較的雑な作り。
5	坏	口縁部径 (14.2cm) 器高 6.7cm	口縁部は短く外反する。体部は内湾しながら立ち、底部は丸底を呈する。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリの後ナデ、内面ナデの後暗文風の細かいミガキを施す。	赤色粒・白色粒 片岩粒 外-淡茶褐色 内-暗褐色	約1/3。 外面に黒斑あり。
6	坏	口径 13.4 器高 6.6	口縁部はやや厚く、短く外反する。体部は内湾ぎみに開き、底部は丸底を呈する。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。	片岩粒・白色粒 内外-淡茶褐色	ほぼ完形。 器表面は荒れている。

## 第2節 土 壙

### 第43号土壙（第12図）

本土壙は、B地点の調査区南側に位置し、重複する古墳時代前期の第32号住居跡と第4号溝跡を切り、中世の第17号溝跡によって切られている。平面形は直径90cmの円形を呈し、深さは30cmある。覆土は上下2層に分かれ、いずれも暗褐色土であるが、上層はロームブロックと鉄斑を均一に含み、下層は焼土粒と炭化粒を微量含んでいる。出土遺物は、土壙底面に自然石が1個あり、覆土中より甕の破片(1)が出土している。本土壙の時期は、覆土の状態や出土遺物より、古墳時代後期(鬼高期)のものと考えられるが、土壙の性格は不明である。



第26図 第43号土壙出土遺物

### 第43号土壙出土遺物観察表

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	甕	口縁部径 (20.6cm)	粘土紐積み上げ成形。口縁部は立ちぎみで、先端部は緩やかに外反する。胴部は張る。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。	小石・片岩粒 赤色粒・白色粒 外-淡橙褐色 内-暗灰褐色	1/4。 器表面は荒れている。

### 第44号土壙（第17図）

本土壙は、B地点の調査区中央部のやや南側に位置し、重複する古墳時代前期の第36号住居跡を切っている。土壙上面は攪乱による削平を受けている。平面形は直径65cmの円形を呈し、確認面からの深さは10cm程度である。出土遺物は、覆土中より五領期の土器片が少量出土している。本土壙の時期は、出土土器より古墳時代前期と思われる。土壙の性格は不明である。

### 第45号土壙（第4図）

本土壙は、B地点の調査区中央部に位置し、重複する古墳時代前期の第6号住居跡を切っている。土壙の北東側半分は調査区外に位置するため、全容は不明である。平面形は、調査区内で検出された部分から推測すると、方形もしくは長方形に近い形態を呈するものと思われる。確認面からの深さは56cmあり、壁は直線的に立ち上がり、底面は平坦をなす。出土遺物は、覆土中より五領期や鬼高期の土器片が少量出土している。本土壙の時期は、覆土の状態や出土遺物より古墳時代後期の可能性が高いと思われる。土壙の性格は不明である。

### 第3節 溝跡

溝跡は、B地点で6条(第3・4・12・13・17・18号溝跡)とC地点で2条(第7・8号溝跡)の計8条が検出されている。これらのほとんどはA地点で検出された溝跡の延長にあたるものであるが、B地点の第17・18号溝跡は今回の調査で新たに確認されたものである。時期は、古墳時代前期1条(第7号溝跡)・後期以降2条(第4・12号溝跡)、中世以降5条(第3・8・13・17・18号溝跡)である。

古墳時代前期の第7号溝跡は、覆土中より土器を多数出土し、その形態より方形周溝墓の可能性も考えられるものであるが、後述するように一般的な方形周溝墓とはやや異なるところもあり、その判断は慎重を要する。古墳時代後期以降の第4号溝跡と第12号溝跡は、出土遺物がなく明確な時期は不明であるが、他の遺構との重複関係や土層観察の結果より、該期の可能性が高いと考えられるものである。このうちの第12号溝跡は、古墳時代後期の鬼高Ⅱ期に埋没した河川跡の上に掘削されており、覆土中には砂利が充満していた。中世以降の溝跡は、比較的溝幅が狭く調査区域内を南北方向に流路をとるものが多い。このうち調査区の西側に位置する第3号溝跡と第13号溝跡は、東側の第3号溝跡の方が約25cm深い。両溝跡は幅約5m前後の間隔で西側の女堀川の旧流路に並行して掘削されており、両溝跡の間を道とする道路の側溝的な機能が推測される。

#### 第7号溝跡(第27図)

本溝跡は、すでにA地点で南西側が調査されている。今回のC地点の調査では、本溝跡の北側延長部分が一部検出されただけであり、その全容を明らかにすることはできなかった。本溝跡の北側には古墳時代前期～後期に掘削された性格不明のSX-1があり、それによって切られている。

形態は、方形周溝墓のような鉤の手状に曲がる形態を呈するが、南西側と北西側の溝は直角をなさずやや開いている。また南東側の溝は、南側コーナー部を少し曲がったところで途切れている。規模は、北西～南東方向7m、北東～南西方向は6.5mまで確認できる。幅は、南西側の溝が上幅70cm・北西側の溝が上幅50cmで南西側の溝のほうがやや広いが、溝底面は両方ともほぼ同一規模である。溝断面の形態は、底面が平坦な逆台形を呈するが、溝の壁面は外側よりも内側の傾斜がやや緩やかになっている。確認面からの深さは約35cm前後を測る。北西側の溝の外側には不整形を呈するテラス状の浅い張り出しが見られるが、これはC地点の土層断面の観察結果によれば、覆土が北西側溝の東側に堆積する古墳時代前期の包含層である黒色土(第38図第1層)と同一であり、本溝跡の上面を被覆してそのまま東側に厚く堆積していることから、本溝跡には伴わないと考えられる。

出土遺物は、A地点側の覆土中より壺・甕・小形甕・甗・高環・小形高環・器台等の土器が多数出土しており(第28図)、甕・小形甕・甗のなかに叩き成形の施されたものがある。このうちNo1の甕は、北西側溝の外側のテラス状の浅い張り出し部からの出土であり、本溝跡に直接伴うものか微妙である。今回のC地点の調査では覆土中より土器片が数片出土しただけである。

本溝跡は、その形態から方形周溝墓の可能性が考えられるわけであるが、南西側と北西側溝が直角をなさずやや開きぎみの形態を呈することや、溝の壁面が外側に比べて内側の方がかなり緩やかであることなど、一般的な方形周溝墓とは若干異なっている。また、本溝跡の北西側溝の上面から



**第7号溝跡土層説明**

(A—A')

第1層：淡灰黄色土層

第2層：暗灰色土層

第3層：灰黄色土層

第4層：淡黒色土層

(D—D')

第I'層：淡灰色土層（旧水田層。A軽石を含む。）

第II層：淡灰色土層（旧水田層。A軽石を含む。）

第III層：暗灰褐色土層（中世水田層。B軽石を多量含み、下部に田床を伴う。）

第IV層：黒灰褐色土層（古代水田層？。B軽石を伴わない。）

第5層：黒褐色土層（C地点黒色土第1層。）

第6層：暗黄褐色土層（ローム粒子を均一に、焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

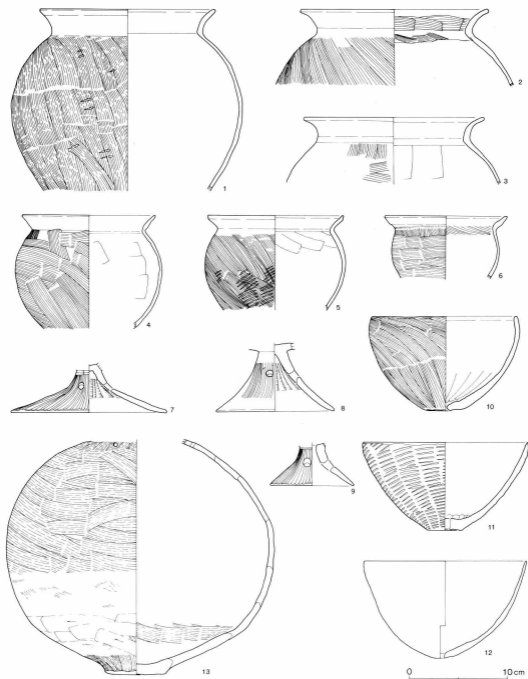
第7層：暗灰色土層（白色粒子を均一に、焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

第8層：暗灰褐色土層（鉄斑・ローム粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）



第27図 第7号溝跡

東側のかなり広い範囲にわたり、本溝跡とあまり時間差のない古墳時代前期の土器片を多数包含する黒色土が厚く堆積しており、本溝跡が方形周溝墓であれば、その方台部盛土は築造されてからかなり早い時期に削平あるいは崩壊したことが伺える。



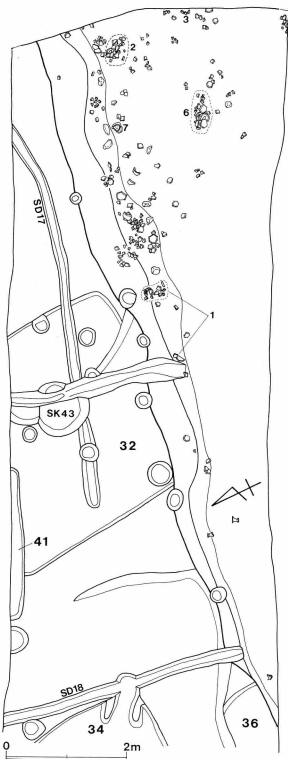
第28図 第7号溝跡出土遺物（富田他1985より）

## 第4節 河川跡

河川跡は、B地点の調査区北西端と南東端の両側で検出されている。このうち北西端の河川跡は、現在の女堀川の改修に伴って埋められた旧流路跡で、A地点の調査区北西端でも確認されている。

南東端の河川跡は、古墳時代中期～後期のもので、古墳時代前期の第32号住居跡と第36号住居跡を切っている。本河川跡の調査は、調査範囲が狭いうえに河川跡の深さが現地表面より2mを越えることから、その作業にはかなりの危険が伴うと判断されたため、河川跡を全掘することはあきらめ、河川跡の上層全体の調査と下層の一部を層位的に確認するに止めた。

調査区内では河川跡の中央部から北側の一部が検出されているが、河川跡の南側については、調査区が狭いため確認することができなかった。そのため河川跡の規模については明確ではないが、調査区内の状況から推測すると、おそらく幅10m位はあるものと思われる。現地表面からの深さは2.30m、確認面からの深さは1.80mを測り、基本土層のローム土・緑色粘土層を掘り込んで、その下の砂利層にまで達している。流路は、B地点の調査区内ではほぼ東西方向をとっているが、その東側延長にあたるA地点側では未確認であるため明らかではない。ただ、河川跡の東側延長のA地点では、河川跡よりも古い古墳時代前期～中期と推測される第23号住居跡や、河川跡と同時期の鬼高Ⅰ期を主体とする第11号溝跡が検出されていることから、河川跡はそれらの南側に湾曲する流路をとる可能性も考えられる。本河川跡は、現在本遺跡のすぐ西側を流れる女堀川の古墳時代における流路か



第29図 河川跡西側調査区上層遺物出土状態

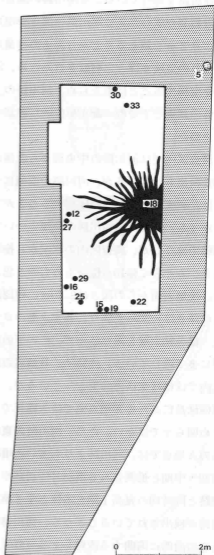
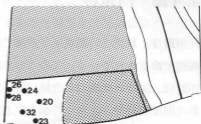


あるいはその支流と考えられるが、本遺跡より東側の下流については、現在の地表面の地割りに流路の痕跡が確認できないため不明である。

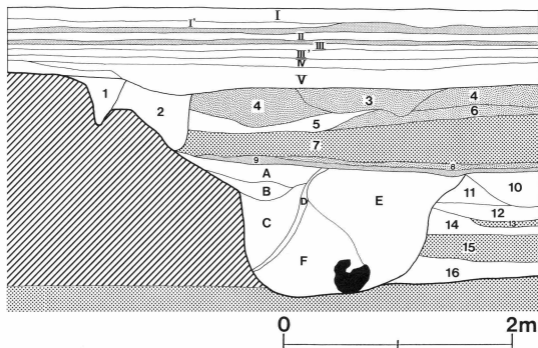
覆土は、中位の厚く堅い鉄分凝集層の明茶褐色土(第31図第9層、第32図第7層)を境にして、上層と下層に分かれ、出土土器も上層と下層ではその時期や出土状態に明確な相違が認められる。

上層(第31図第3～9層、第32図第1～7層)は、確認面から鉄分凝集層までの深さが約70cmあり、北側の壁面は緩やかに傾斜している。底面にあたる鉄分凝集層は、北側で若干上がるがほぼ平坦をなしている。覆土は上半の砂質粘土層と下半の砂利層を主体とする。下半の砂利層は、薄い砂層と厚い砂利層が互層をなしており、比較的含水量があったことを伺わせる。上層からの出土遺物は、鬼高Ⅱ期の土器を主体とし(第33図)、上層の各層から満遍なく破片が多数出土している。これらの出土土器のうち、接合によりある程度器形が復元できるようなものは、上半の砂質粘土層からの出土が多いが完形品は少ない。

下層(第31図第10～16層、第32図第8～15層)は、確認面からの深さが1.80mあり、底面は平坦をなしている。北側の壁面については、部分的な調査のため明確にできなかったが、第31図の土層断面に見られる北に向かって倒れた倒木痕の第D層が河川跡下層部分の壁面であったと考えられ、それによると比較的緩やかに傾斜していたようである。覆土は上半の灰褐色粘土層と下半の緑灰色粘土層を主体とするが、場所によって一様ではなく、部分的に砂利層が見られるなど、複雑な様相を呈している。特に上半の灰褐色粘土層の上部には、鉄分の凝集塊を帯状に含む複雑な落ち込み状の土層(第31図第10層、第32図第8・9層)が見られ、下層埋没後に小規模な表流水が流れていたことが伺える。下層からの出土遺物は、和泉期から鬼高Ⅰ期の土器を主体とするが(第34・35図)、上層と違って完形品が多く出土している。また、最下層の暗緑灰色粘土層からは土器はまったく出土しない。これらの土器は、単一時期のものではなく時期差の認められるものを含むが、それらの出土状態は層位的に整合しない。



第30図 河川跡下層遺物出土状態



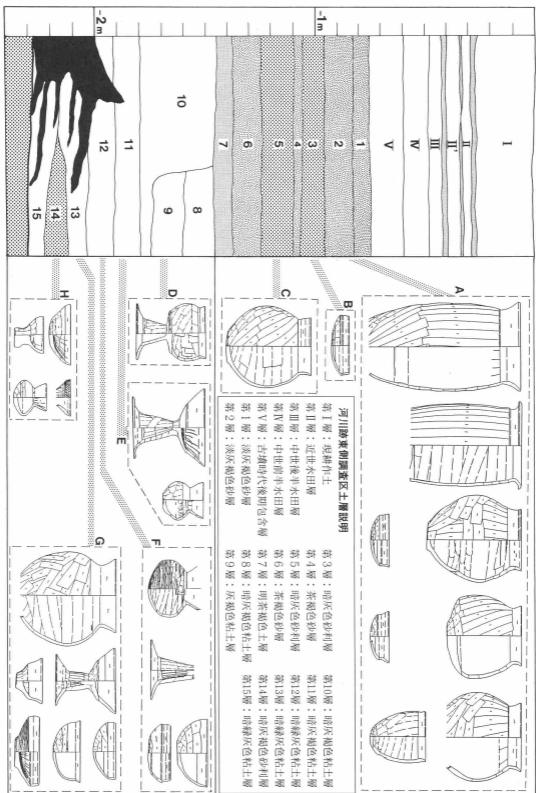
第31図 河川跡西側調査区土層断面図

河川跡西側調査区土層説明

- 第1層：暗灰褐色土層（ローム粒子を均一に、ロームブロックを微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第2層：暗灰褐色土層（ローム粒子・マンガン塊を均一に、焼土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第3層：淡灰褐色砂層（鉄斑・白色粒子を均一に含む。粘性・しまりともない。）
- 第4層：淡灰褐色砂層（鉄斑・白色粒子を均一に、焼土粒子を微量含む。粘性はなく、しまりを有する。）
- 第5層：淡灰褐色粘土層（鉄斑・マンガン塊を均一に、第4層砂質ブロックを微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第6層：淡灰褐色砂層（鉄斑・砂を均一に含む。粘性はなく、しまりを有する。）
- 第7層：暗灰色砂利層（砂、小礫を多量含む。粘性・しまりともない。）
- 第8層：茶褐色砂層（細砂を主体にする。粘性・しまりともない。）
- 第9層：明茶褐色土層（鉄分凝集層。）
- 第10層：淡灰褐色粘土層（鉄斑・砂質ブロックを均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第11層：灰褐色粘土層（鉄斑・砂を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第12層：灰褐色粘土層（鉄斑・ローム粒子・炭化粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりはない。）
- 第13層：暗灰褐色砂利層（小礫を多量含む。粘性・しまりともない。）
- 第14層：暗灰色粘土層（鉄斑・砂を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第15層：暗灰褐色砂利層（小礫を多量に、砂・灰褐色粘土ブロックを微量含む。粘性・しまりともない。）
- 第16層：暗緑灰色粘土層（細砂・木片を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）

土層捻転趾

- 第A層：灰褐色粘土層（鉄斑・マンガン塊を均一に、ロームブロックを微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第B層：暗黄褐色土層（鉄斑・マンガン塊・ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第C層：暗黄灰褐色土層（第X層ブロックを多量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第D層：明黄灰褐色粘土層（基本層変質土層。）
- 第E層：暗緑灰色粘土層（基本層捻転土層。）
- 第F層：緑灰色粘土層（基本層捻転土層。）



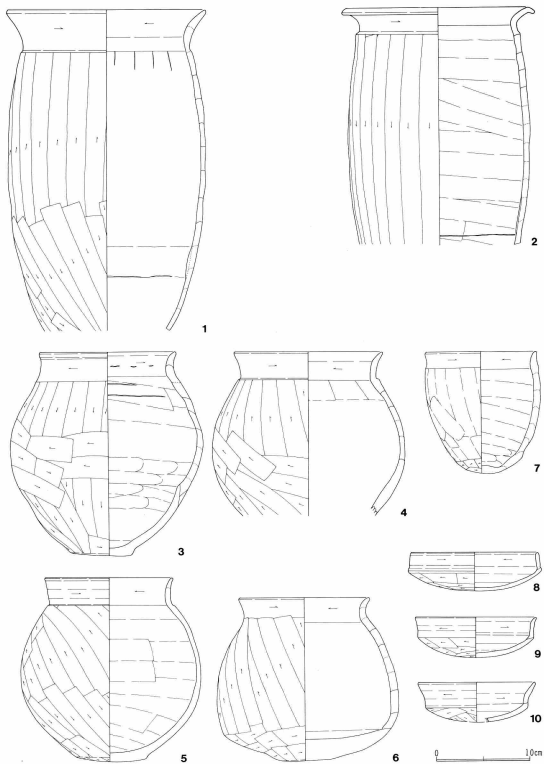
第32圖 河川跡東側調查區土層模式圖

土器以外では、倒木(写真図版12-2)・木の根株(写真図版14-1)・モモの核3個が、下半の緑灰色粘土層より検出されている。このうちの木の根株は、根は底面の砂利層内には伸びずに緑灰色粘土層中に大きく横に張っており、幹は根の少し上の部分で引きちぎられたような状態で折れている。

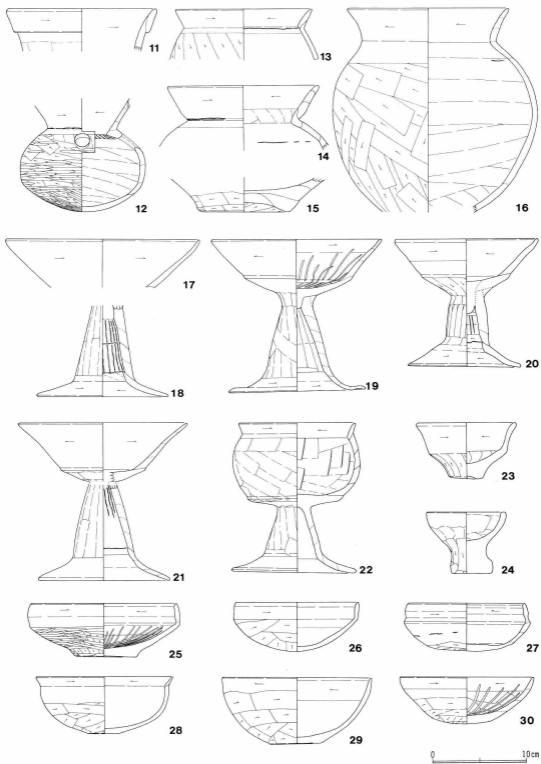
以上のような覆土の堆積状態や遺物の出土状態から当時の本河川跡の景観と変遷を推測すると、下層の和泉期から鬼高Ⅰ期の段階では、部分的な砂利層の存在から、一時的な大水の流れが認められるものの、覆土中に鉄分の凝集層が見られない小さな斑点状の鉄斑を含む粘土層を主体としていることから、地下水位の高い沼地状の土壤を形成していたことが伺え、倒木や木の根株の検出より、その縁辺部の所々には木が生えていた景観が推測される。上層の鬼高Ⅱ期の段階になると、川からこの沼地に水が流れ込み、沼地上面は水流によって削平されて、厚い鉄分凝集層による平坦な川底が形成される。その後ある程度の期間水は恒常的に流れていたようであるが、砂利や砂の堆積による川底の上昇によるものか、あるいは河川流路の変更があったのか、水量が減少して砂質土が厚く堆積し、鬼高Ⅱ期の間に若干の窪みを残す程度に埋没したようである。

B地点河川跡上層出土土器観察表

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	甕	口径 (21.0) 残存高33.9	粘土紐積み上げ成形。口縁部は緩やかに外反する。胴部は張らず、長胴を呈する。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。	片岩粒 内外-淡茶褐色	約1/3。
2	甕	口縁部径 (20.4cm) 残存高 25.2cm	粘土紐積み上げ成形。口縁部は強く外反し、口唇部は下方に向く。胴部は張らず、長胴を呈する。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面寛ナデ。	片岩粒・赤色粒 白色粒 内外-淡茶褐色	約1/3。
3	甕	口径 14.4 器高 21.6 底径 6.4	粘土紐積み上げ成形。口縁部は短く外反ぎみに立つ。胴部は張り、最大径を中位にもつ。底部は平底を呈す。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面上半寛ナデ、下半指ナデ。底部外面ケズリ。	片岩粒・白色粒 内外-淡茶褐色	約4/5。 器形はやや歪みをもつ。
4	甕	口縁部径 (15.6cm)	粘土紐積み上げ成形。口縁部は緩やかに外反する。胴部は張る。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。	片岩粒・赤色粒 内外-茶褐色	約1/2。
5	甕	口径 13.4 器高 19.5 底径 7.4	粘土紐積み上げ成形。口縁部は外反ぎみに立つ。胴部は張り、底部は平底を呈す。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面寛ナデ。底部外面ケズリ。	片岩粒・赤色粒 白色粒 内外-明茶褐色	完形。 胴部外面に黒斑あり。
6	甕	口径 (8.8) 器高 17.3 底径 5.0	粘土紐積み上げ成形。口縁部は緩やかに外反する。胴部は張り、最大径を下位にもつ。底部は平底を呈する。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面寛ナデの後丁寧なナデ。	片岩粒・赤色粒 白色粒 内外-茶褐色	約4/5。
7	鉢	口縁部径 11.8cm 器高 12.9cm	粘土紐積み上げ成形。口縁部は比較的短く外反ぎみに立つ。胴部は張らず、底部は不安定な丸底を呈する。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリの後ナデ、内面ナデ。底部外面ケズリの後ナデ。	片岩粒・赤色粒 白色粒 内外-淡茶褐色	ほぼ完形。 外面に黒斑あり。
8	環	口縁部径 (13.4cm) 器高 4.1cm	口縁部は直線的にやや内傾し、体部との境には凹線を有する。体部は浅く、底部は丸底を呈する。	口縁部内外面左回りのヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。	片岩粒・赤色粒 白色粒 内外-明茶褐色	約1/3。



第33図 河川跡上層出土遺物



第34図 河川跡下層出土遺物(1)



第35図 河川跡下層出土遺物(2)

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
9	坏	口縁部径 (12.8cm) 器高 4.3cm	口縁部は直立ぎみに開き、口唇部は強く外反する。体部は浅く、底部は丸底を呈する。	口縁部内外面右回りのヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。	赤色粒・白色粒 外-淡橙褐色 内-黒色	口縁部1/4破片。
10	坏	口縁部径 (12.2cm) 器高 4.2cm	口縁部は緩やかに外反し、体部との境に浅い凹線を有する。体部は浅く、底部は丸底を呈する。	口縁部内外面右回りのヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。	赤色粒・白色粒 内外-淡茶褐色	口縁部1/4破片。 外面に黒斑あり。

B地点河川跡下層出土土器観察表

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
11	壺	口縁部径 (15.8cm)	粘土紐積み上げ成形。口縁部は緩やかに外反し、やや幅広の複合口縁を呈する。	口縁部内外面ヨコナデ。頸部外面ナデ。	赤色粒・白色粒 内外-暗茶褐色	口縁部1/5破片。
12	甕	残存高 12.0cm	粘土紐積み上げ成形。口縁部は直線的に外傾する。体部はやや扁平ぎみに張り、底部は丸底を呈する。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後ケズリを施しミガキを加える。体部内面ナデ。頸部内面シボリ目。	赤色粒・白色粒 内外-淡茶褐色	約3/4。 体部の穿孔は焼成後。
13	甕	口縁部径 (14.4cm)	粘土紐積み上げ成形。口縁部は直線的に短く外傾する。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。	赤色粒・白色粒 内外-暗茶褐色	口縁部1/4破片。
14	甕	口縁部径 (16.0cm)	粘土紐積み上げ成形。口縁部は厚く直線的に外傾し、口唇部はやや外反する。	口縁部外面ハケの後ヨコナデ、内面ナデの後ヨコナデ。胴部内外面丁寧なナデ。	赤色粒・白色粒 内外-淡褐色	口縁部1/4破片。
15	甕	底部径 9.6cm	粘土紐積み上げ成形。底部は比較のおおきく、上げ底を呈する。	胴部下半内外面ナデ。底部外面及び外縁ケズリ、内面ナデ。	赤色粒・白色粒 内外-暗茶褐色	底部1/2。
16	甕	口縁部径 17.0cm 器高 21.6cm	粘土紐積み上げ成形。口縁部は緩やかに外反する。胴部は張り、最大径を中位に有する。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。	小石・黒色粒 白色粒 外-淡茶褐色 内-淡灰褐色	約1/2。 外面に黒斑あり。
17	高坏	口縁部径 (20.4cm)	粘土紐積み上げ成形。口縁部はやや内湾ぎみに開く。	口縁部内外面ヨコナデ。	赤色粒・白色粒 内外-淡茶褐色	口縁部1/5。
18	高坏	脚端部径 13.8cm	粘土紐巻き上げ成形。脚端部は緩やかに外反する。	脚部外面ナデ、内面シボリ目。脚端部内外面ヨコナデ。	赤色粒・白色粒 内外-淡茶褐色	脚部のみ。
19	高坏	口縁部径 18.0cm 器高 16.2cm 脚端部径 14.4cm	粘土紐積み上げ成形。口縁部は外反ぎみに開く。脚部はやや内湾ぎみに上方に向かってすぼまる。脚端部は緩やかに外反し、口唇部は弱く屈曲する。	口縁部内外面ヨコナデの後、内面に放射状暗文を施す。脚部外面丁寧なナデ、内面ケズリ。脚端部内外面ヨコナデ。	赤色粒・白色粒 内外-茶褐色	完形。

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
20	高 環	口縁部径 15.2cm 器 高 13.6cm 脚端部径 11.9cm	粘土紐積み上げ成形。口縁部はやや外反ぎみに開き、口唇部は若干内湾する。脚部は短く立ち、脚端部は比較的高く、やや湾曲して開く。	口縁部内外面ヨコナデの後、外面下半ナデ。環部外面ケズリ。脚部内外面ナデ。脚端部内外面ヨコナデ。	赤色粒・白色粒  内外-暗茶褐色	ほぼ完形。
21	高 環	口縁部径 (17.8cm) 器 高 (16.7cm) 脚端部径 13.8cm	粘土紐積み上げ成形。口縁部はやや外反ぎみに開き、環部との境に明瞭な稜を有する。脚部は内湾ぎみに上方に向かってすぼまり、脚端部は緩やかに外反する。	口縁部内外面ヨコナデ。脚部外面ナデ、内面シボリの後ナデ。脚端部内外面ナデ。	赤色粒・白色粒  内外-淡橙褐色 環部内-暗褐色	環部-1/4。 脚部-4/5。 環部と脚部は接合せず、器形は図上復元。
22	台付鉢	口縁部径 14.4cm 器 高 15.9cm 台端部径 13.2cm	粘土紐積み上げ成形。口縁部は短く外反する。胴部はやや張り、下端に稜を有する。台部は比較的短く内湾ぎみに開き、台端部は緩やかに外反する。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ナデ、下端ナデの後外縁ケズリ。胴部内面匏ナデ。台部内外面ナデ。台端部内外面ヨコナデ。	赤色粒・白色粒  内外-明茶褐色	鉢部-3/4。 台部-完形。
23	環	口径 (10.6) 器高 6.0 底径 3.6	粘土紐積み上げ成形。口縁部は緩やかに外反し、体部との境に稜を有する。底部はやや上げ底を呈する。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面匏ナデ。底部外面ナデ。	片岩粒・白色粒 赤色粒  内外-明茶褐色	約2/3。
24	環	口径 8.4 器高 6.5 底径 4.2	手捏成形。口縁部は内湾しながら開き、口唇部は平坦面をもつ。底部は体部より長く突出し、平底を呈す。	口縁部外面ナデ、内面匏ナデ。底部外面ケズリ、内面指ナデ。	片岩粒・白色粒 赤色粒  内外-茶褐色	ほぼ完形。
25	環	口径 15.2 器高 5.7 底径 6.5	口縁部はやや内傾ぎみに立ち、体部との境に稜を有する。体部は内湾ぎみに開く。底部は若干突出し平底を呈する。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリの後ミガキ、内面ナデの後複雑な放射状暗文を施す。底部外面ケズリの後ミガキ。	赤色粒・白色粒  内外-淡褐色	完形。  外面に黒斑あり。
26	環	口縁部径 13.0cm 器 高 5.2cm	口縁部は体部との境に明瞭な稜をもち、上方に直立する。体部は比較的深く、底部は丸底を呈する。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面一定方向のナデ。	赤色粒・白色粒  内外-茶褐色	約2/3。
27	環	口縁部径 12.2cm 器 高 5.1cm	口縁部は体部との境に明瞭な稜をもち、内湾ぎみにやや内傾する。体部は比較的深く、底部は丸底を呈する。	口縁部内外面及び体部内面ヨコナデ。体部外面ナデ。底部外面ナデの後ケズリ。	赤色粒・白色粒  内外-淡茶褐色	完形。
28	環	口径 14.4 器高 6.0 底径 3.5	口縁部は短く外傾し、口唇部は尖る。体部は内湾しながら開き、底部は小さな平底を呈する。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後下半ケズリ、内面ナデ。	赤色粒・白色粒  外-明茶褐色 内-黒褐色	約4/5。
29	碗	口径 15.8 器高 7.1 底径 5.4	粘土紐積み上げ成形。口縁部は体部とともに内湾ぎみに開く。体部は深く、底部は平底を呈する。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面丁寧ナデ、底部外面ナデ。	赤色粒・白色粒 黒色粒  内外-茶褐色	完形。



No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
30	埴	口縁部径 14.2cm 器高 4.9cm	粘土紐積み上げ成形。口縁部は体部とともに内湾ぎみに開く。体部は比較的浅く、底部は丸底を呈する。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリの後ナデ、内面丁寧なナデの後放射状暗文を施す。	赤色粒・白色粒  内外-暗茶褐色	約2/3。
31	小形丸底壺	口径 8.4 器高 9.3 底径 3.6	粘土紐積み上げ成形。口縁部は内湾ぎみに外傾する。胴部は張り、底部は平底。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面丁寧なナデ、内面ナデ。	赤色粒・白色粒  内外-茶褐色	約4/5。 胴部内面指頭圧痕あり。
32	小形丸底壺	口縁部径 6.2cm 器高 7.6cm	口縁部径は直線的に外傾する。胴部は張り、底部は丸底ぎみの形態を呈する。	口縁部外面ヨコナデ、内面篋ナデの後ヨコナデ。胴部外面ケズリの後ナデ、内面ナデ。	片岩粒・赤色粒 白色粒  内外-暗茶褐色	完形。 外面に黒斑及び煤の付着あり。
33	小形丸底壺	底部径 4.0cm	粘土紐積み上げ成形（胴部上半輪積み）。胴部は張り、底部は平底を呈する。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ナデ、内面指ナデ。底部外面ナデ。	片岩粒・赤色粒 白色粒 内外-暗茶褐色	胴部のみ。 外面に黒斑あり。
34	小形丸底壺	口縁部径 (8.4cm)	粘土紐積み上げ成形。口縁部は緩やかに外反し、口唇部は短く方に立つ。	口縁部外面ケズリの後半ヨコナデ、内面ヨコナデ。口唇部外面篋描の綾杉文。	片岩粒・赤色粒 白色粒 内外-茶褐色	口縁部1/4。

## 第5節 その他の遺構と遺物

### SX-1 (第36図)

本遺構は、C地点の調査区中央部に位置し、古墳時代前期の第7号溝跡と南側に厚く堆積する黒色土を切っている。調査区内で検出されたのは遺構の南端部にあたる部分で、大部分は北側の調査区外に位置する。そのため本遺構の形態や性格は不明であるが、調査区内で検出された部分からは、自然に形成されたものではなく、人為的に掘削されたものと考えられる。

調査区内で検出された遺構の南端部の形態は、緩やかな弧状を呈している。壁は、比較的緩やかに傾斜しているが、中位に平坦なテラス状の段をもつ。底面は平坦な広い面をなし、北側に向かって若干傾斜している。また、底面の壁際には幅が狭く浅い不均一な筋状の落ち込み(第6層)が部分的に見られ、壁際に小規模な溝が巡っていた可能性がある。現地表面からの深さは1.60m、確認面からの深さは1mを測る。

覆土は6層に分かれるが、FAと推定される黄褐色火山灰粒ブロックを含む第2層を境に、比較的大きな鉄分の凝集塊を攪拌したように均一に含む淡灰褐色粘土の上層(第1・2層)と、比較的小きな鉄分の凝集塊を均一に含む暗灰褐色粘土を主体とする下層(第3～6層)に分けることができる。このうちの下層には、水田層に見られる鉄分凝集層の田床ほどではないが、他に比べて鉄分を帯状に多量に含む層(第4層)があり、本遺構の掘り込み内には水がある程度滞水していたことが伺える。

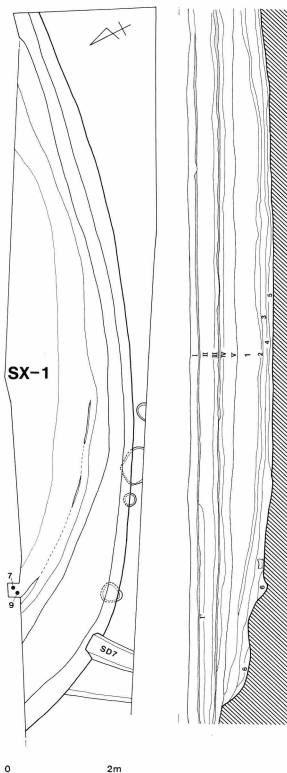
出土遺物は、覆土中より土器片が多数出土しているが、接合により器形がある程度復元できるようなものは少ない。時期は五領期のものが主体で、量的には下層から多く出土しているが、本遺構が切っている南側の黒色土から出土した土器と接合するものもあり、黒色土から混入したのも多いことが考えられる。上層からは、多くの五領期の土器片とともに少量の鬼高Ⅱ期の土器片が出土

しており、覆土中の火山灰粒とともに本遺構の埋没時期が推定できる。また第1層上面の基本第V層からは、数片ではあるが真間期前半の土器片(第39図)が出土していることは注目される。

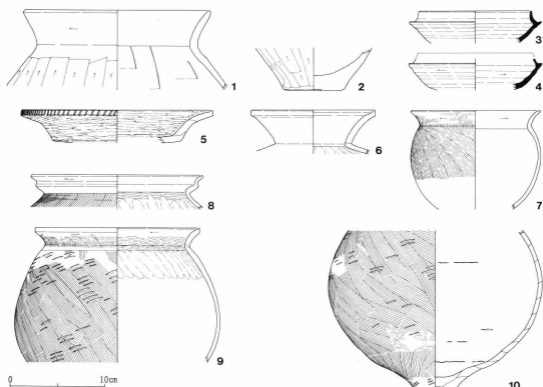
本遺構の時期は、掘削時期については明確ではないが、遺構の重複関係や覆土の堆積状況及び遺物の出土状態より、本遺構の南側に見られる古墳時代前期の包含層である黒色土の堆積後に掘削されたことは確かである。そして後期の鬼高Ⅱ期にはほぼ埋没し、真間期前半頃には遺構上面に淡い黄褐色土の基本第V層が堆積して平坦地になったことが推測される。

#### SX-1 土層説明

- 第I層：淡灰色土層（現水田層。下部に田床を伴う。）
- 第I'層：淡灰色土層（旧水田層。A軽石を含む。）
- 第II層：淡灰色土層（旧水田層。A軽石を含む。）
- 第III層：暗灰褐色土層（中世水田層。B軽石を多量含み、下部に田床を伴う。）
- 第IV層：黒灰褐色土層（古代水田層？。B軽石を含まない。）
- 第V層：淡黄褐色土層（ローム土を主体とする。）
- 第1層：淡灰褐色土層（鉄斑を均一に、白色粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第2層：淡灰褐色土層（鉄斑・黄褐色火山灰粒ブロックを均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第3層：淡灰褐色土層（鉄斑・白色粒子を均一に、炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第4層：暗灰褐色土層（鉄斑を多量に、炭化粒子・白色粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第5層：暗灰褐色土層（鉄斑を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第6層：灰褐色土層（鉄斑・マンガン塊・ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）



第36図 C地点SX-1



第37図 C地点SX-1出土遺物

C地点SX-1出土遺物観察表

No	器種	法量	形態・成形手法的特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	甕	口縁部径 (19.6cm)	粘土紐積み上げ成形。口縁部は緩やかに外反し、胴部は張る。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面裏ナデ。	片岩粒・赤色粒 外-淡茶褐色 内-淡茶褐色	口縁部1/4。 破片。 上層出土。
2	甕	底部径 6.4cm	粘土紐積み上げ成形。底部は平底を呈し、やや厚い。	胴部外面ケズリ、内面ナデ。底部外面ケズリ。	片岩粒・赤色粒 内外-暗茶褐色	底部のみ。 上層出土。
3	須恵器 坏	口縁部径 (11.8cm)	口縁部は上方に湾曲しながら内傾し、受部は薄くやや上方に向かって横に開く。	内外面とも回転ナデ。	小石・白色粒 内外-暗灰色	口縁部1/3。 破片。 上層出土。
4	須恵器 坏		口縁部は内傾し、受部はやや上方に向かって横に開く。	内外面とも回転ナデ。	白色粒 内外-淡灰色	体部1/4。 上層出土。
5	壺	口縁部径 (20.0cm)	粘土紐積み上げ成形。口縁部は頸部より横に開き、それから緩やかに外反する。口唇部は平坦な面をもつ。	口縁部内外面ミガキ。口唇部平坦面には木口状工具による列点状の刺突文を施す。	赤色粒・白色粒 内外-淡茶褐色	口縁部1/6。 破片。 上層出土。
6	壺	口縁部径 (13.0cm)	粘土紐積み上げ成形。口縁部は緩やかに外反する。口唇部は平坦な面をもち、上方につまみ上げる。	口縁部内外面ナデ。胴部内面指頭圧痕あり。	小石・片岩粒 白色粒 内外-淡橙褐色	口縁部2/3。 下層出土。
7	鉢	口縁部径 (13.6cm) 残存高 10.4cm	粘土紐積み上げ成形。口縁部は緩やかに外反する。胴部は張り、最大径を中位にもつ。	口縁部内外面ハケの後ヨコナデ。胴部外面ハケの後ナデ、内面ナデ。	片岩粒・赤色粒 白色粒 外-淡褐色 内-淡橙褐色	約1/2。 下層出土。

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
8	甕	口縁部径 (18.0cm)	粘土紐積み上げ成形。口縁部はS字状口縁を呈し、口脰部内面は凹線状に窪む。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面及び頸部内面ハケ。胴部内面指ナデ。	赤色粒・白色粒 外-暗褐色 内-淡褐色	口縁部1/4 破片。 上層出土。
9	甕	口縁部径 17.2cm 残存高 14.2cm	粘土紐積み上げ成形。口縁部は緩やかに外反し、口脰部は平坦な面をもつ。胴部は張り最大径を中位にもつ。	口縁部内外面ハケの後ヨコナデ。胴部外面右上がりのタタキの後ナデを施しハケを加える。内面丁寧なナデ。	片岩粒・赤色粒 白色粒 白色粒 外-暗茶褐色 内-淡茶褐色	約1/2。 タタキ目は 2~3条/1cm。 下層出土。
10	甕	底部径 (4.8cm) 残存高 16.7cm	粘土紐積み上げ成形(底部輪軸技法)。底部は小さく突出し、中央部は窪む。胴部は張り最大径を中位にもつ。	胴部外面右上がりのタタキの後ナデを施しハケを加える。内面丁寧なナデ。底部外面ナデ。	片岩粒・赤色粒 白色粒 白色粒 外-暗茶褐色 内-明茶褐色	約1/2。 タタキ目は 2条/1cm。 下層出土。

### 黒色土遺物包含層

黒色土包含層は、C地点の調査区中央部から東側にかけて見られ、地面が東側に向かって緩やかに傾斜する所に比較的厚く堆積している。この黒色土は南側に隣接するA地点でも確認されており、土器が集約的に出土したことにより住居跡として考えられている第24号住居跡もこの黒色土中に存在していたようである(富田他1985)。他の遺構との重複関係は、C地点では第7号溝跡の上面を被覆し、性格不明のSX-1に切られている。

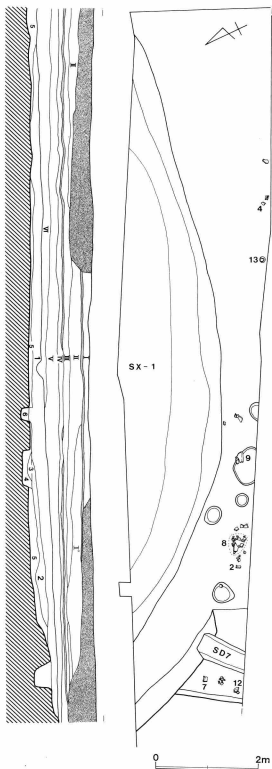
確認面からの深さは、C地点調査区中央部の第7号溝跡付近で15cm、C地点調査区東側で最高45cmを測る。黒色土上面には、第40図Na13の小形丸底壺等の和泉式土器を少量含む暗褐色土(第VI層)と、真間期前半頃のものと考えられるローム土を主体とする淡黄褐色土(第V層)が比較的厚く被覆している。覆土は6層に分かれ、地面の傾斜に沿って西側からの流入による堆積が認められる。また、包含層下には性格不明の浅いピットが数箇所見られる。

出土遺物は、古墳時代前期の土器片を多数包含しているが、完形品は見られない。量的には第7号溝跡の上面からその東側に傾斜して堆積している第1層から多く出土しているが、この第1層は他の黒色土と違って覆土中に焼土粒子や炭化粒子を顕著に含んでおり、出土土器の中には二次焼成を受けて器表面が荒れているものや、器形の歪んでいるもの(第40図11)も見られる。

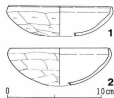
この黒色土は、出土遺物より古墳時代前期に堆積し、中期にはほぼ埋没を終えたことが推測されるが、地形の形状や北側にSX-1が掘削されていることから見て、自然堤防内に入り込む小規模で浅い開析谷の埋没土と考えられる。

### 基本第V層出土遺物観察表

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	環	口径(10.8) 高(3.2)	体部は内湾しながら開き、口縁部は直線的に短く内傾する。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面比較的丁寧なナデ。	白色粒 内外-暗橙褐色	口縁部1/4 破片。
2	環	口径(10.4) 高(4.0)	体部は比較的深く内湾しながら開き、口縁部は短く内傾する。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面は器表面が荒れていて不明瞭。	白色粒 内外-淡橙褐色	口縁部1/4 破片。



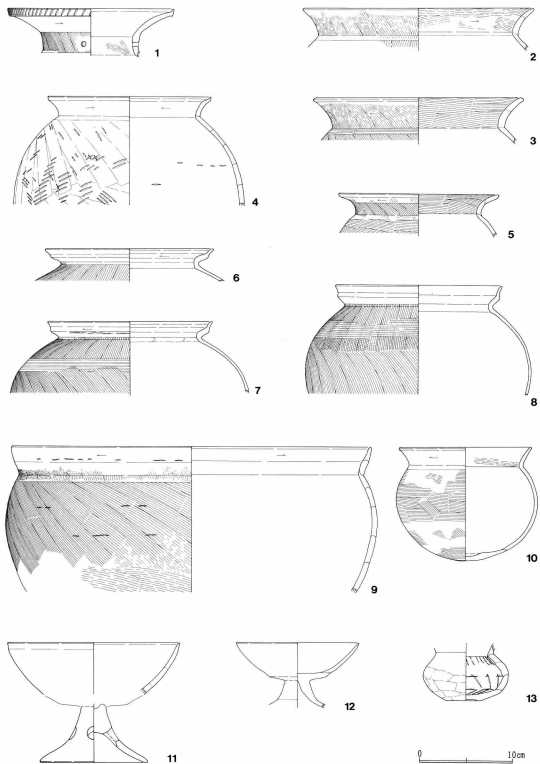
第38図 C地点黒色土遺物出土状態



第39図 基本第V層出土遺物

C地点黒色土層説明

- 第I層：淡灰色土層（現水田層。下部に田床を伴う。）
- 第I'層：淡灰色土層（旧水田層。A軽石を含む。）
- 第II層：淡灰色土層（旧水田層。A軽石を含む。）
- 第III層：暗灰褐色土層（中世水田層。B軽石を多量含み、下部に田床を伴う。）
- 第IV層：黒灰褐色土層（古代水田層？。B軽石を含まない。）
- 第V層：淡黄褐色土層（ローム土を主体とする。）
- 第VI層：暗褐色土層（古墳時代前期～中期。）
- 第1層：黒褐色土層（鉄斑・焼土粒子・炭化粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第2層：黒褐色土層（鉄斑・マンガン塊・ローム粒子・ロームブロックを均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第3層：黒褐色土層（鉄斑・ローム粒子・炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第4層：暗灰褐色土層（マンガン塊・ローム粒子を均一に、焼土粒子・炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第5層：黒褐色土層（鉄斑を均一に、ローム粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
- 第6層：暗灰褐色土層（ローム粒子・マンガン塊を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）



第40图 C地点黑色土出土遗物

C地点黒色土出土遺物観察表

No	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	壺	口縁部径 (17.6cm)	粘土紐積み上げ成形。頸部は直立し、口縁部は緩やかに外反する。口唇部外面は平坦な面をもつ。	口縁部内外面ヨコナデ。頸部外面ハケ、内面ハケの後ナデ。口唇部外面寛刃工具による刺突文。	片岩粒・赤色粒 白色粒 外-明茶褐色 内-淡褐色	口縁部1/4 破片。 頸部穿孔は 焼成前。
2	甕	口縁部径 (24.4cm)	粘土紐積み上げ成形。口縁部は緩やかに外反し、頸部は「く」の字状を呈する。	口縁部内外面ハケの後ヨコナデ。胴部外面ハケ、内面ナデ。	片岩粒・赤色粒 白色粒 内外-淡褐色	口縁部1/4 破片。
3	甕	口縁部径 (22.2cm)	粘土紐積み上げ成形。口縁部は緩やかに外反し、頸部は「く」の字状を呈する。	口縁部外面ハケの後ヨコナデ、内面ハケ。胴部外面ハケ、内面ナデ。	片岩粒・赤色粒 白色粒 内外-淡茶褐色	口縁部1/4 破片。
4	甕	口縁部径 (17.2cm)	粘土紐積み上げ成形。口縁部は緩やかに外反し、口唇部は平坦な面をもつ。胴部は張る。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面左上がりのタタキの後右上がりのタタキを加えナデを施す。内面ナデ。	片岩粒・赤色粒 白色粒 内外-茶褐色	約1/4。 タタキ目は 2条/1cm。
5	甕	口縁部径 (17.0cm)	粘土紐積み上げ成形。口縁部は緩やかに外反し、口唇部外面に平坦な面をもつ。	口縁部外面ハケの後ナデ、内面ハケ。胴部外面ハケ、内面ナデ。	片岩粒・赤色粒 外-茶褐色 内-淡褐色	口縁部1/4 破片。
6	甕	口縁部径 (17.8cm)	粘土紐積み上げ成形。口縁部はS字状を呈する。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ハケ、内面ナデ。	赤色粒・白色粒 内外-淡褐色	口縁部1/4 破片。
7	甕	口縁部径 (17.4cm)	粘土紐積み上げ成形。口縁部はS字状を呈し、胴部は張る。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ハケの後肩部横線、内面ナデ。	片岩粒・赤色粒 外-淡茶褐色 内-淡褐色	口縁部1/4 破片。
8	甕	口縁部径 (17.6cm)	粘土紐積み上げ成形。口縁部はS字状を呈す。胴部は張り、最大径を中位にもつ。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ハケの後、肩部に右回りの横線、内面ナデ。	赤色粒・白色粒 内外-暗灰褐色	約1/4。
9	鉢	口縁部径 (38.0cm)	粘土紐積み上げ成形。口縁部は若干内湾ぎみに外傾し、胴部はあまり張らない。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ハケの後下半ナデ、内面ナデ。	片岩粒・白色粒 内外-茶褐色	口縁部1/4 破片。
10	鉢	口縁部径 (14.0cm) 器高 12.0cm	粘土紐積み上げ成形。口縁部は緩やかに外反する。胴部は張り、底部は丸底ぎみの不安定な形態を呈する。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ナデの後部分的なハケ、内面ナデ。底部内外面ナデ。	片岩粒・赤色粒 白色粒 外-暗茶褐色 内-淡茶褐色	約3/4。
11	高坏	口縁部径 (18.2cm) 推定高 (12.7cm)	粘土紐積み上げ成形。口縁部は内湾しながら開く。脚部は緩やかに外反し、中位に円孔を4箇所穿つ。	坏部・脚部とも器表面は二次焼成を受けて荒れているため観察不能。	小石・赤色粒 内外-淡橙褐色	口縁部1/4。 脚部2/3。 器形はやや 歪んでいる。
12	高坏	口縁部径 (13.0cm) 残存高 6.9cm	粘土紐積み上げ成形。口縁部は内湾しながら開き、坏部は比較的浅い。脚部は中位より大きく外反する。	器表面が荒れているため観察不能。	片岩粒・白色粒 内外-明茶褐色	約1/3。
13	小形丸底壺	底部径 3.9cm	粘土紐巻き上げ成形。胴部は強く張り偏平ぎみである。底部は平底を呈する。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリの後ナデ、内上半シボリ目・下半麓ナデ。	片岩粒・白色粒 赤色粒 内外-明茶褐色	約2/3。 基本第Ⅵ層 より出土。

## 第V章 川越田遺跡出土の叩き甕について

### はじめに

本遺跡は、隣接する梅沢遺跡(富田他1985)や後張遺跡(立石1982・83)と時期的な補充関係を有する同一集落と考えられ、女堀川中流域の中心的集落として、古墳時代前期から後期の期間にはほぼ継続的に営まれた大規模集落の一部である。本遺跡群は、女堀川中流域における低地内の自然堤防上に立地する遺跡の中では、比較的早い時期に出現し、特に集落の出現期に本地域ではあまり例を見ない畿内系の叩き甕を伴うことは注目されよう。現在のところ、本地域が属する北武蔵(埼玉県)地方では、叩き甕が単体で出土する例がほとんどであり(注1)、また、本地域と距離的に近く各時代にわたって常に密接な関係を有する上野(群馬県)地方では、叩きを施した土器があまり顕著に認められない(注2)という周辺地域での出土状況を考慮すると、本遺跡では複数の遺構から比較的まとまって出土している点で、特異な遺跡と言えよう。

東日本から出土する畿内系の叩き甕については、近年菊地健一氏や西川修一氏によって、その集成と検討が行われ、その波及時期や伝播ルートが具体的に論じられている(菊地1990、西川1991)。両者の見解にはかなりの相違が認められるが、それぞれに注目すべき点も多い。しかし、菊地氏の場合は、地域の限定はされていないが、興味の主体が太平洋沿岸地域の遺跡にあるようであり、本遺跡も含めた内陸部の遺跡の大多数は、その集成自体から漏れている。また、叩き甕の系譜に関しても、本遺跡の叩き甕も該当すると考えられる叩きの後にハケ調整を施す氏分類のⅢ類とⅣ類を、庄内甕の系譜として考えられている節があるなど問題がある。西川氏の場合は、比較的簡潔明瞭でまとまった文章ではあるが、そのぶん結論に性急なように感じられ、随所に慎重な扱いが伺われるものの、叩き甕の基本的な分類や検討がかなり抽象的で、具体的な説明が不足していると思われる。また、本遺跡の叩き甕については氏の分類されたYZ甕の典型として注目されているが、氏の興味の主体は叩き甕の波及期を知る上で畿内地方と直接対比できるYO甕にあるため、このYZ甕の土器としての具体的な検討は行われていない。そのため、ここでは両氏の研究を参考にしながら、東日本の叩き甕の中では新しいあるいは後出的とされた本遺跡の叩き甕について、再認識する意味であらためて少し検討してみたい。

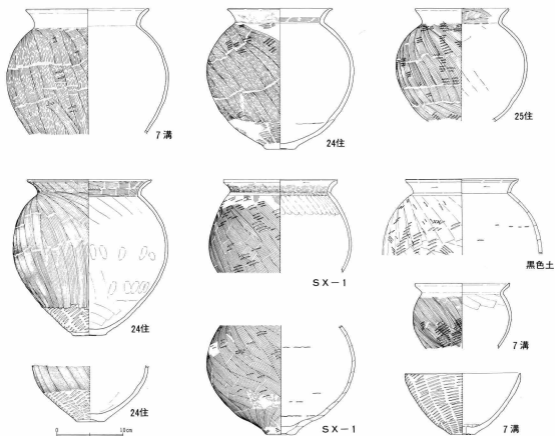
### 1. 叩き甕の特徴

本遺跡では、A地点の第24号住居跡・第25号住居跡・第7号溝跡、B地点の第32号住居跡、C地点のSX-1・黒色土包含層より、叩きの痕跡が認められる土器が破片を含めて12個体分出土している。器種としては甕と甔があるが、甔は叩き甕の下半分の形態と類似する単孔の小形のものが、A地点第7号溝跡から1点出土しているだけで、他はすべて甕と考えられるものである(第41図)。これらの叩き甕は、A地点の調査区北東側からC地点に位置する遺構から多く出土しており、それらの遺構は第7号溝跡→黒色土包含層→SX-1という重複関係を有するが、それらの遺構から出土した叩き甕には、形態や技法上の差異はほとんど認められない。

本遺跡から出土した叩き甕は、口唇部が丸く仕上げられているもの(A形態)と、口唇部外面に平坦な面をもち、口唇部上端を上方につまみ上げるもの(B形態)の2形態がある(注3)。このうちの



口縁部B形態は、当地域の甕に見られる口縁部の形態としては一般的なものではなく、叩き甕特有の口縁部形態とすることもできる。そのため、A地点第24・25号住居跡から出土しているハケなどの二次調整により外面に叩きの痕跡が直接観察できない口縁部B形態の大形及び小形の甕(第42図)についても、叩き成形による甕の可能性が考えられる(注4)。これらは、いずれも胴部が球形に強く張り、最大径を胴部の中位にもつ。底部は、いずれも比較的薄い輪台状の小さな平底を呈するが、胴部から若干突出するもの(第24号住居跡・SX-1)と突出しないもの(第24号住居跡・第32号住居跡)がある。成形は、粘土紐の積み上げによる叩き成形(注5)であるが、胴下半部に一か所比較的明確な接合痕が認められるものが多く、胴下半部とそれより上の部位とは、いわゆる「分割成形」(都出1974)によって成形されたものと考えられる。叩きは、二次調整のために明瞭ではないが、1cmあたり2~3条の比較的粗い右上がりのものが主体で、叩き目の角度がほぼ一定しているものが多いことから、おそらく「連続ラセンタキ手法」(都出1974)によるものと思われる。また、C地点黒色土包含層出土の甕(第40図4)には、右上がりの叩きの下に左上がりの叩きの痕跡が見られるものもある。外面の調整は、叩き成形の後に部分的に雑なナデを施し、最終的に斜方向のハケ調整を胴部の大部分に加えるものがほとんどである(注6)。内面調整は、第7号溝跡から出土した小形甕(第28図5)にケズリのような調整が部分的に観察されているものの、ほとんどが比較的丁寧なナデ



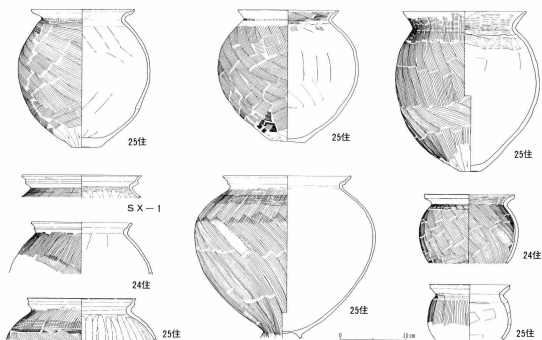
第41図 川越田遺跡出土叩き成形土器

調整で、底部内面にハケ調整や全面にケズリ調整を施すものはない。口縁部は、ハケ調整の後にヨコナデを施すものが主体的である。

以上のような特徴をもつ本遺跡の叩き甕は、都出比呂志氏が第V様式甕の特徴とされた叩き成形技法・輪台状の底部・分割成形技法(都出1974・82)がそれぞれ認められることから、直接的か間接的かは即断できないが、基本的には畿内第V様式系甕の系譜を引くものとして引くことができる。東日本で出土している叩き甕は、畿内地方の庄内甕ではなく、第V様式系甕の系譜を引くものがほとんどである(小川1983、岩崎1990、西川1991)ことから、本遺跡の叩き甕も東日本における一般的な系譜の在り方を示していると言える。

## 2. 叩き甕の編年の位置と系譜

本遺跡の叩き甕の編年の位置については、すでに山川守男氏と西川氏によって簡単に解れられている(山川1984、西川1991)。山川氏は、田口一郎氏による群馬県野川流域に分布するS字甕の分類と編年(田口1981)を参考にして、本遺跡の所在する女堀川中流域のS字甕の編年とその様相について検討を行っている。その中で本遺跡の叩き甕にも若干触れられ、A地点第25号住居跡(富田他1985)で伴出したS字甕の時期(山川氏のⅢ期1段階)から、畿内の布留1式(縦向4式)に相当するとされ、「他地域のタタキメ調整土器とは時間的なギャップが生じる」とされた。西川氏は、関東地方出土の叩き甕を畿内叩き甕の「約束事」をかなり忠実に守っているものと、「ハケを多用するなど、本来的な『約束事』にない成形理念を持つもの」に大別し、前者をオリジナルに近いことから「Y O甕」、後者を在地的ということから「Y Z甕」と仮称され、本遺跡の叩き甕などは「Y Z甕」の典型とされた。そして「相対的にY Z甕の方が後出的」と考え、本遺跡の叩き甕については、伴出したS字



第42図 川越田遺跡出土甕

甕C類(赤塚1990)との関係から、「YZ甕」の中でも新しい庄内期終末の段階としている。また、この「YZ甕」の系譜については、明確には述べられていないが、「オリジナルには見られない、型式変化をしているもの」、「在地での変化?という観点」などの表現から、畿内地方から直接的に波及したのではなく、在地において二次的に変化した可能性が高いものと考えているように思われる。ただし、畿内の奈良県纏向遺跡で、纏向1式(第V様式終末)段階の甕A(第V様式系甕)に、ハケ調整により叩きの一部を消す甕が少量ながら存在することが指摘されている(関川1976)ことに注意され、「YZ甕といったものには、退嬰化の進んだものの他、YO甕と前後関係にないものが含まれる可能性がある」と、畿内地方に直接系譜をもつものがある可能性についても留意されている(注7)。

このように、両氏ともA地点第25号住居跡で叩き甕と伴出したS字甕の時期から、畿内地方との併行関係を考えられ、山川氏は「布留1式」、西川氏は「庄内期終末」の時期とされている。両者の畿内編年における時期の表現には差異があるが、その時期比定が叩き甕自体によるものではなく、S字甕を媒介とした時期比定であることに注意されよう。この第25号住居跡から出土したS字甕は、赤塚次郎氏のS字甕C類に該当するものである。赤塚氏は近年S字甕をさらに細分され、C類は古と新の2段階に分けられている(赤塚1990)。それによると第25号住居跡出土のS字甕は、胴部は肩が強く張るC類でも古い形態ではあるが、口縁部は上段の屈曲が弱く、口縁端部がやや肥厚するC類でも新しい形態のものが見られることから、ほぼC類の古段階から新段階に移行する時期と考えられる。このS字甕C類は、東海西部地方における赤塚氏の「廻間Ⅲ式」、加納俊介氏の「塔の越期」の指標となっており、両氏とも畿内の「布留式古段階」に併行するとされている(赤塚1990、加納1991)。第25号住居跡の叩き甕とS字甕C類の伴出関係については、遺構の検出状況などから若干の不安もあるが、この伴出関係を認めるならば、ほぼ布留式古段階(纏向4式)に併行する時期と考えることができよう。しかし、今後の類例による検証と伴出した他の器種による検討が必要と思われる。

確かに本遺跡の叩き甕は、その形態的特徴や製作技法上の特徴から見ても、畿内地方の庄内式に見られる「伝統的第V様式甕」(注8)の型式組列の中でも比較的新しい段階に位置付けられるものであろう。畿内地方の伝統的第V様式甕の様相については、米田敏幸氏により北島池下層式以後胴部の球形化とともに底部が平底から尖底あるいは丸底化するという型式変化が示されており、その終末時期については畿内中腹部では氏の「庄内Ⅲ期」に消滅し、畿内周辺部では「布留式直前段階」にあたる氏の「庄内Ⅳ期」まで残存するとされている(米田1988・91)。庄内甕の出現以後に進行する伝統的第V様式甕の尖底・丸底化は、米田氏や菊地氏が指摘されるように(米田1988、菊地1990)、庄内甕の影響によるものと考えられるが、本遺跡の叩き甕のような薄い輪台状の平底形態のものも残存していることは注意される。このような米田氏が指摘された畿内地方における伝統的第V様式甕の様相が、畿内地方で一律なのか筆者には解らないが、尖底・丸底化の早い地域や遅い地域、主体的な地域や客体的な地域など、特に畿内中腹部に比べて該期の良好な資料が揃っていない畿内周辺部とされる地域では、その残好する時期も含めて細かな地域差や地域内での遺跡差もあるのではないかとと思われる。いずれにしても、本遺跡の叩き甕が、畿内地方の伝統的第V様式甕の直接的な影響によるものなのか、第V様式末から庄内式の古い段階に東日本に波及した第V様式系甕がその後在地において変化したものなのか、畿内周辺部の伝統的第V様式甕の具体的な様相が明らかになる

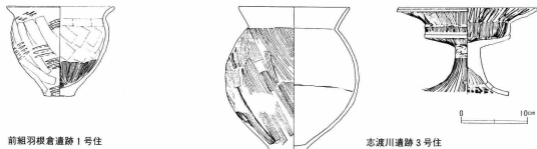
のを待たなければ、現状では明確な判断はできないであろう。

### 3. 見玉地方の叩き甕

見玉地方では、現在のところ本遺跡の他には僅かに神川町前組羽根倉遺跡(柿沼他1986)で、小形の叩き甕が1点出土しているだけである(第43図)。前組羽根倉遺跡は、本遺跡より約7km上流の見玉丘陵に立地する、弥生時代後期後半～古墳時代前期を主体とする遺跡であるが、叩き甕は弥生時代後期後半の樽式土器を主体とする第1号住居跡の炉内より出土している。この叩き甕は、最大径を口縁部に有し、頸部の収縮と胴部の張りが弱く、底部は厚く突出し外面中央部が窪むもので、寺沢薫氏の形式分類(寺沢1980)では、畿内地方で第V様式後半より見られるとされた甕ⅢCの系列に類似する形態を呈している。叩きは、二次調整のため明確ではないが、1cmあたり2条の粗い右上がりの叩きで、底部から口縁部まで叩き目の角度がほぼ一定していることから、「連続ラセンタタキ手法」と「口縁叩き出し手法」(都出1974)によって、底部より一気に叩き上げた可能性が高いと思われる。外面の調整は、叩きを施した後、胴部全面に篋ナデ調整を加えて叩き目を消している。内面も篋ナデ調整であるが、底部には放射状のハケ調整を施している。

この前組羽根倉遺跡出土の叩き甕は、底部が厚く突出する形態であることや底部内面に放射状のハケ調整を施すなど第V様式甕の特徴をもつが、その編年の位置については、口径に対して器高の低い器形、叩き技法の特徴、及び伴出した在地の樽式土器の時期から見て、第V様式後半でも比較的新しい時期と考えられ、北島池下層式に近い時期に位置付けられるものと推測される(注9)。これは、西川氏が指摘された関東地方への畿内系叩き甕の波及期に近いものであり(西川1991)、本遺跡の叩き甕の特徴でもある外面二次調整がすでにこの段階に見られることは注目されよう。

このように前組羽根倉遺跡の叩き甕は、本遺跡の叩き甕よりも数型式古いものであり、すでに第V様式後半より法量分化して系列の異なる両者を直接対比して考えることは、資料の希少性も含めて慎重にならざるを得ないが、時期的に両者の中間に位置し、両遺跡の叩き甕の関係を考える上で注意すべき資料として、本遺跡の南東側約4kmの志戸川流域に位置する美里町志渡川遺跡第3号住居跡(美里町1986)出土の土器がある。志渡川遺跡第3号住居跡は、他地域の影響を受けた在在系土器の他に、北陸系・東海西部系・畿内系の土器が出土していることで著名である(注10)。このうちの畿内系の土器としては、庄内式に特徴的な「庄内系有段高環」(米田1991)に類似する高環が注目されているが、これとともに底部が輪台状の平底を呈するハケ調整の甕が出土している(第43図)。この甕は、胴部外面に直接叩き目が観察できないため、叩き成形によるものか判断できないが(注11)、



第43図 周辺遺跡出土の畿内系土器

底部が輪台状を呈することや器形が庄内式前半段階頃の平底形態の伝統的Ⅴ様式甕に類似していることから、Ⅴ様式甕の影響を受けた土器である可能性が高いと考えられ、この甕に本遺跡の叩き甕と類似した手法のハケ調整が用いられていることに注意される。

以上のように兎玉地方では、弥生時代後期末に畿内Ⅴ様式甕の系譜を引く甕がごく少量波及し、その後本遺跡の段階まで継続して存在していた可能性が考えられる。そして、それらは当地方に波及した当初より、外面にハケやナデによる二次調整を施して叩き目を消すという技法的な特徴を持っていた可能性も推測される。この技法的特徴が西川氏の言われるように畿内地方の「オリジナルには見られない」「本来的な『約束事』にない成形理念を持つもの」であるならば、畿内地方から東日本へ波及する過程で主系統から分岐した別系統のいわゆる在地化したタイプと言える。しかし、当地方の叩き甕の基本的な成形技法は、本遺跡の段階においても畿内地方のⅤ様式甕とほとんど同一と考えられ、特徴的な外面の二次調整の技法についても、調整範囲が外面の大部分か一部かという差異や主体的・客体的という量的な問題もあるが、畿内地方で伝統的に散見されるようである。いずれにしても、当地方の叩き甕の系譜については、前述のように畿内周辺部の伝統的Ⅴ様式甕の様相が不明瞭な状況もあり、また当地方の資料も極めて限られたものであるため、現状では推測の域を出るものではない。このような外来系土器の検討には、本拠地の土器の系列との系統関係を明確にすることが第一であることは言うまでもないが、在地では第1次波及から本拠地の系統とは異なった変化をする縦の系列による変化とともに、本拠地との交通関係を保持している場合は、第2次・第3次波及あるいは他の波及地域からの影響といったその時々々の横の系列による変化も考慮しておく必要があり、より複雑な系統関係が存在する可能性についても留意しておくべきであろう。

#### 注

- (注1) 埼玉県内で叩き甕を出土した遺跡は、本遺跡の他に管見に触れたものでは、戸田市鍛冶谷・新田口遺跡(西川他1986)、岩槻市平林寺遺跡(塩野他1972)、蓮田市馬込大原遺跡(藤原他1983)、桶川市築上遺跡(小川1983)、行田市池守遺跡(斎藤他1981)、熊谷市池上遺跡(中島他1981)、神川町前組羽根倉遺跡(柿沼他1986)などがある。
- (注2) 西川修一氏の集成(西川1991)によれば、渋川市神宮寺西遺跡(小林他1988)で叩き成形の広口壺と甕の破片が出土しているだけであり、関東地方の叩き甕では「現段階では、もっとも東北部の例である」(西川1991)とされている。
- (注3) この口縁部形態に見られる二者は、畿内のⅤ様式後半の甕から庄内式併行の伝統的Ⅴ様式甕に両者とも見られるようであり、関東地方においても千葉県佐倉市大崎台遺跡(柿沼他1985・86・87)や同じく千葉県柏市戸張一番割遺跡(平岡他1985)で伴出が認められ、本遺跡でもA地点第24号住居跡で両者が出土している。
- (注4) ただし、ここで言う口縁部B形態も含む口唇部外面に平坦面をもつ外面ハケ調整の平底甕は、布留式古段階に併行する時期の越後地方にも顕著に分布しており(坂井1986)、越後地方との関係も注意されよう。
- (注5) 都出氏は、畿内Ⅴ様式甕に見られる叩きをⅣ様式甕の叩きとは区別して、成形技法として考えられている(都出1974)。これに対して、叩きを一貫して調整技法とする考えもある(川西1982)が、ここでは一応都出氏の考えに従っておくことにする。
- (注6) 埼玉県内の遺跡から出土した叩き甕は、いずれも叩き成形の後にナデやハケ等の二次調整を全面あるいは部分的に施すという共通した特徴が認められるが、鍛冶谷・新田口遺跡第27号溝跡出土の甕のように、叩き成形の後にミガキ調整を施すものもある。
- (注7) このような叩きの上にハケ調整を部分的あるいは大部分に施す甕は、畿内各地のⅤ様式～庄内式期の伝統的Ⅴ様式甕に散見される。特に庄内甕の搬入が遅れる山城地方は、隣接する近江地方との影響関係からか、ハケなどによる二次調整を施す甕が他の畿内地域に比べてⅤ様式の段階から顕著に見られる地域のものであり、庄内甕の影響があまり認められない関東地方の「Y乙甕」との関係で注目されよう。

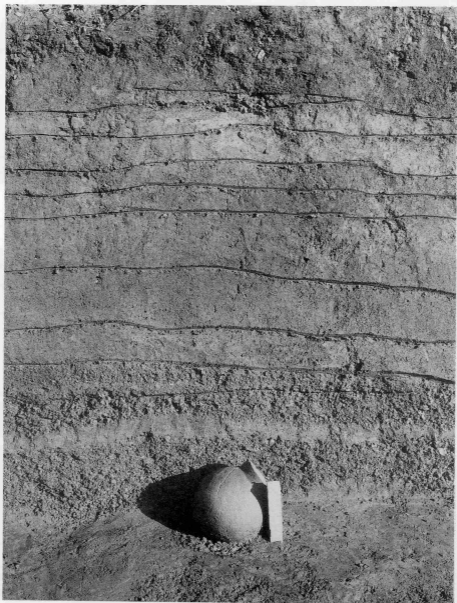
- (注8) 近年、庄内式を規定する「庄内甕」の出現期については、従来第V様式終末に位置付けられた北鳥池下層式(都出1974)の段階に遡上することが、河内地方で指摘されている(嶋村1986、米田1988)。そのため、北鳥池下層式の内面ナデ調整の甕及びそれに継続するとされた上田町1式の内面ケズリ調整の甕は、時間的前後関係にあるものではなく、庄内式の伝統的V様式甕として同時に存在した地域的な甕として解釈されている(米田1988)。
- (注9) この前組羽根倉遺跡の叩き甕について、菊地氏はⅢ類(庄内式)に該当させている(菊地1990)。西川氏は本文ではまったく触れられていないが、図では北鳥池下層式に近い時期に位置付けられており、その系譜は氏のY O甕やY Z甕の系譜とは異なるものとして表現されている(西川1991)。
- (注10) 志渡川遺跡第3号住居跡出土土器の編年の位置については、山川氏は纏向2式～3式前半に(山川1984)、比田井克仁氏は纏向2式に(比田井1987)それぞれ決定されている。
- (注11) 美里町教育委員会の長瀧歳康氏の御好意により実見させてもらったが、都出氏によるとハケなどの二次調整の下に隠れている叩き目の存否の識別には、かなりの熟練が必要とされている(都出1986)。

## 参考文献

- 赤塚次郎(1990)『廻間遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第10集
- 荒川正夫他(1986)『早稲田大学本庄校地埋蔵文化財発掘調査概報2』早稲田大学
- 井上尚明(1986)『古井戸・埴塚塚I』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第64集
- 岩崎卓也(1990)『古墳の時代』教育社歴史新書
- 小川貴司(1983)『特別展図録 三～四世紀の東国』八王子市郷土資料館
- 太田博之(1991)『本庄遺跡群発掘調査報告書V -公塚塚古墳-』本庄市埋蔵文化財調査報告第19集
- 加納俊介(1991)『東海』古墳時代の研究6 -土師器と須恵器- 雄山閣
- 柿沼修平他(1985)『大崎台遺跡発掘調査報告書I』佐倉市大崎台B地区遺跡調査会
- (1986)『大崎台遺跡発掘調査報告書II』佐倉市大崎台B地区遺跡調査会
- (1987)『大崎台遺跡発掘調査報告書III』佐倉市大崎台B地区遺跡調査会
- 柿沼幹夫他(1978)『東谷・前山2号墳・古川端』埼玉県遺跡発掘調査報告書第16集
- (1979)『下田・諏訪』埼玉県遺跡発掘調査報告書第21集
- (1986)『神川村前組羽根倉遺跡の研究』埼玉県立博物館紀要12 埼玉県立博物館
- 川西宏幸(1982)『形容詞を持たぬ土器』『考古学論考-小林行雄博士古稀記念論文集-』平凡社
- 菊地健一(1990)『一つの甕から-弥生時代後期から古墳時代はじめにかけての叩き甕について-』史館、第22号 史館同人会
- 恋河内昭彦(1989)『共和小学校校庭遺跡』児玉町文化財調査報告書第10集
- (1990)『根田遺跡』児玉町文化財調査報告書第12集
- 小林良光他(1988)『神宮寺西遺跡』渋川市発掘調査報告書第21集
- 駒宮史朗他(1979)『雷電下・飯玉東』埼玉県遺跡発掘調査報告書第22集
- 埼玉県(1982)『新編埼玉県史』資料編2
- 埼玉県企業局(1992)『本庄今井工業団地造成事業に係る環境影響評価準備書』
- 斎藤国夫他(1981)『池守遺跡』行田市文化財調査報告書第12集
- 坂井秀弥(1986)『越後における月影式併行期とその前後の土器』『シンポジウム月影式土器について』報告編 石川考古学研究会 シンポジウム実行委員会
- 坂本和俊(1981)『ミカド遺跡の概要』『金屋遺跡群』児玉町文化財調査報告書第2集
- (1984)『埼玉県』古墳時代土器の研究 古墳時代土器研究会
- (1990)『東京・埼玉・神奈川』古墳時代の研究11-地域の古墳Ⅱ・東日本- 雄山閣
- 坂本和俊他(1986)『埼玉県古式古墳調査報告書』埼玉県史編さん室
- 塩野博他(1972)『加倉・西原・馬込・平林寺』埼玉県遺跡調査会報告第14集
- 嶋村友子(1986)『河内における庄内式の甕形土器』『古代』第82号 早稲田大学考古学会
- 菅谷浩之(1984)『北武蔵における古式古墳の成立』児玉町史資料調査報告古代第1集

- 菅谷浩之他 (1969) 『本庄市塚合古墳調査報告書』 本庄市文化財調査報告第8集  
 (1973) 『児玉町・美里村生野山古墳群発掘調査概要』 『第6回遺跡発掘調査報告会発表要旨』 埼玉県考古学会 埼玉県遺跡調査会 埼玉県教育委員会  
 (1976) 『宮下・植ノ口遺跡発掘調査概要』 美里村教育委員会  
 (1978) 『日の森遺跡』 美里村教育委員会
- 鈴木徳雄他 (1991) 『辻ノ内・中下田・塚島・児玉条里遺跡』 児玉町文化財調査報告書第15集
- 関川尚功 (1976) 『纏向遺跡の古式土師器』 『纏向』 奈良県立橿原考古学研究所  
 田口一郎 (1981) 『S字状口縁台付甕の分類と編年』 『元島名将塚古墳』 高崎市文化財調査報告書第22集  
 立石盛詞 (1982) 『後張Ⅰ』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第15集  
 (1983) 『後張Ⅱ』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第26集
- 都出比呂志 (1974) 『古墳出現前夜の集団関係』 『考古学研究』 第20巻第4号 考古学研究会  
 (1982) 『畿内第五様式における土器の変革』 『考古学論考-小林行雄博士古稀記念論文集-』 平凡社  
 (1986) 『タタキ技法』 『弥生文化の研究3-弥生土器Ⅰ-』 雄山閣
- 寺沢 薫 (1980) 『大和におけるいわゆる第五様式土器の細別と二・三の問題』 『六条山遺跡』 奈良県文化財調査報告書第34集
- 徳山寿樹 (1992) 『児玉町藤塚遺跡B地点の調査』 『第24回遺跡発掘調査報告会発表要旨』 埼玉県考古学会 埼玉会館 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 埼玉県教育委員会
- 富田和夫他 (1985) 『立野南・八幡太神南・熊野太神南・今井遺跡群-一丁田・川越田・梅沢』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第46集
- 中島 宏他 (1984) 『池守・池上』 埼玉県教育委員会
- 中村倉司 (1990) 『変形土器から見た弥生社会の地域差』 『土曜考古』 第15号 土曜考古学研究会
- 西川修一 (1991) 『関東のタタキ甕』 『神奈川考古』 第27号 神奈川考古同人会
- 西口正純他 (1986) 『鍛冶谷・新田口遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第62集
- 長谷川 勇 (1983) 『二本松遺跡発掘調査報告書』 本庄市埋蔵文化財調査報告第5集 (第1分冊)  
 (1985) 『夏目遺跡発掘調査報告書』 本庄市埋蔵文化財調査報告第5集 (第2分冊)  
 (1987) 『社具路遺跡発掘調査報告書』 本庄市埋蔵文化財調査報告第5集 (第3分冊)
- 比田井克仁 (1987) 『南関東出土の北陸系土器について』 『古代』 第83号 早稲田大学考古学会
- 平岡和夫他 (1985) 『戸張一番割遺跡』 山武考古学研究所
- 藤原高志他 (1983) 『ささら・佩立・馬込新屋敷・馬込大原』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第24集  
 細田 勝他 (1984) 『向田・権現塚・村後』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第38集
- 本 庄 市 (1976) 『本庄市史』 資料編  
 (1986) 『本庄市史』 通史編
- 増田 一 裕 (1985) 『本庄遺跡群発掘調査報告書Ⅱ-久下東遺跡・遺構編-』 本庄市埋蔵文化財調査報告第7集  
 (1987) 『東富田遺跡群発掘調査報告書』 本庄市埋蔵文化財調査報告第10集  
 (1987) 『南大通り線内遺跡発掘調査報告書Ⅰ』 本庄市埋蔵文化財調査報告第9集 (第1分冊)  
 (1989) 『南大通り線内遺跡発掘調査報告書Ⅱ』 本庄市埋蔵文化財調査報告第9集 (第2分冊)  
 (1989) 『四方田・後張遺跡群発掘調査報告書』 本庄市埋蔵文化財調査報告第14集  
 (1990) 『山根遺跡発掘調査報告書』 本庄市埋蔵文化財調査報告第18集  
 (1991) 『南大通り線内遺跡発掘調査報告書Ⅲ』 本庄市埋蔵文化財調査報告第9集 (第3分冊)
- 増田逸朗他 (1977) 『塚本山古墳群』 埼玉県遺跡発掘調査報告書第10集
- 美 里 町 (1986) 『美里町史』 通史編
- 山川守男 (1984) 『北武蔵児玉地域の古墳時代前期の様相』 『第5回三県シンポジウム-古墳出現期の地域性-』 北武蔵古代文化研究会 群馬県考古学談話会 千曲川水系古代文化研究所
- 柳 進 (1961) 『児玉町八幡山埴輪埴埴窯跡発掘調査報告書』 埼玉県立児玉高等学校
- 柳田敏司 (1964) 『埼玉県児玉郡將軍塚古墳発掘調査概要』 『上代文化』 第34輯
- 米田敏幸 (1988) 『中河内の伝統的Ⅴ様式とその意義』 『考古学論集』 第2集 考古学を学ぶ会  
 (1991) 『近畿』 『古墳時代の研究6-土師器と須恵器-』 雄山閣

# 写真図版







1. 川越田遺跡B地点全景



2. 川越田遺跡C地点全景



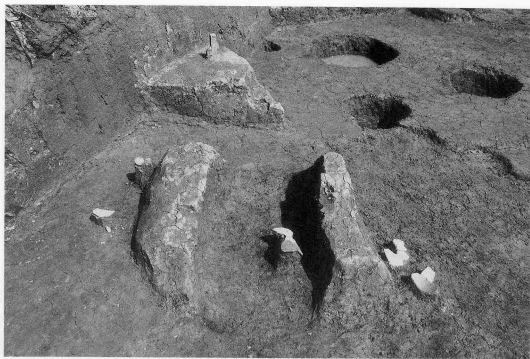
1. 第7号住居跡



2. 第38号住居跡



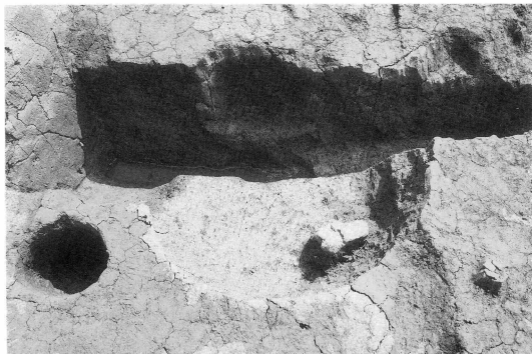
1. 第28号住居跡



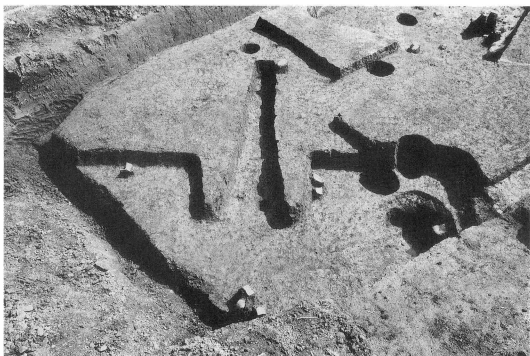
2. 第28号住居跡カマド



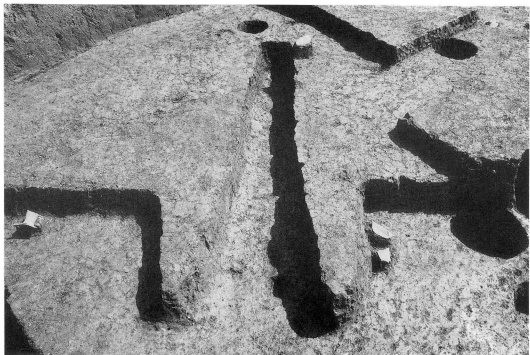
1. 第32号住居跡



2. 第43号土塚



1. 第33号住居跡



2. 第33号住居跡カマド



1. 第34号住居跡



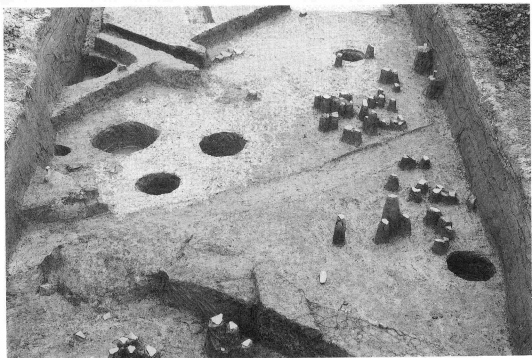
2. 第34号住居跡カマド



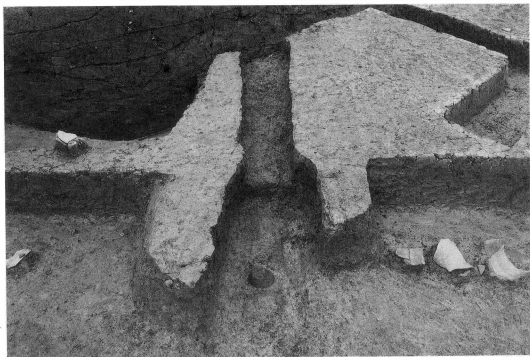
1. 第35号住居跡



2. 第36号住居跡・第44号土塊



1. 第37号住居跡



2. 第37号住居跡カマド

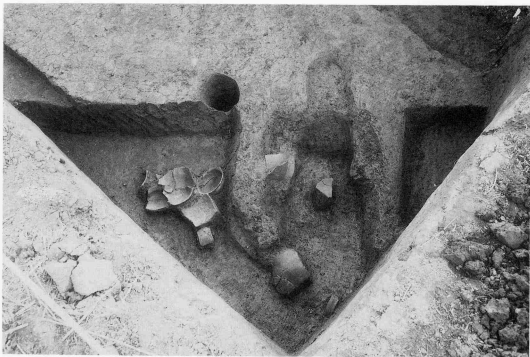




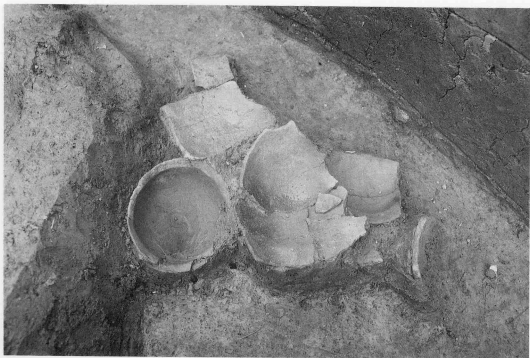
1. 第39号住居跡



2. 第39号住居跡カマド



1. 第42号住居跡



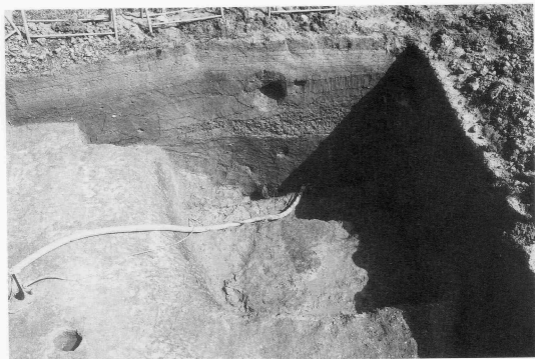
2. 第42号住居跡遺物出土状態



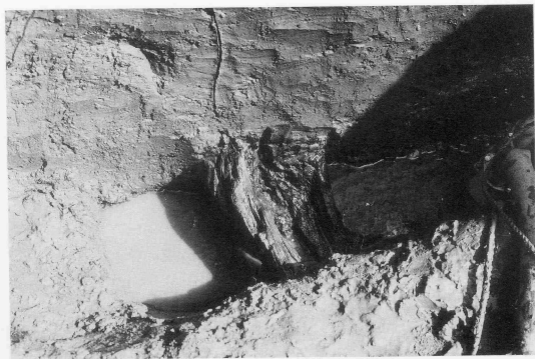
1. B地点河川跡西側調査区上層全景



2. B地点河川跡西側調査区遺物出土状態



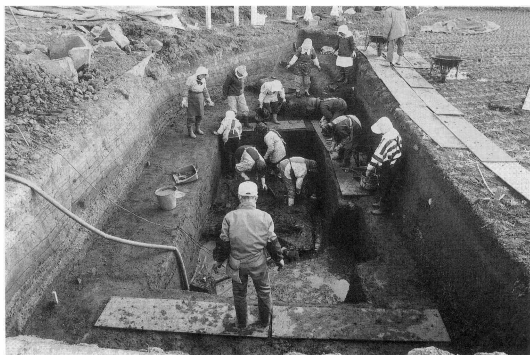
1. B地点河川跡西側調査区土層断面



2. B地点河川跡西側調査区下層倒木出土状態



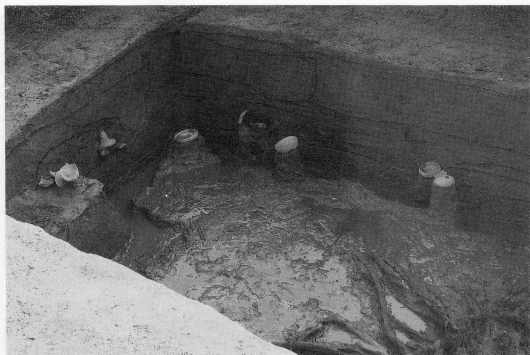
1. B地点河川跡東側調査区



2. B地点河川跡東側調査区下層調査風景



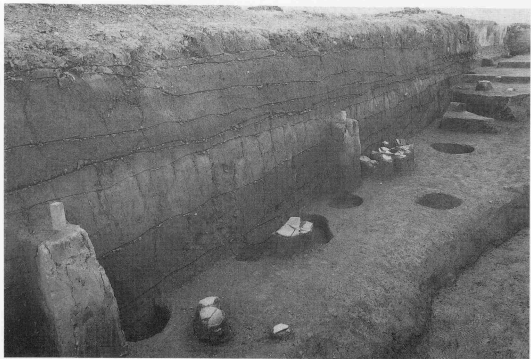
1. B地点河川跡東側調査区下層自然木出土状態



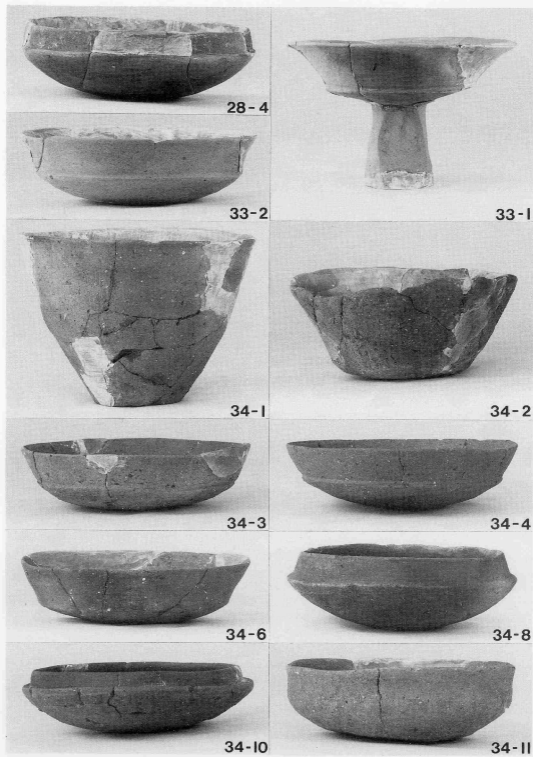
2. B地点河川跡東側調査区下層遺物出土状態



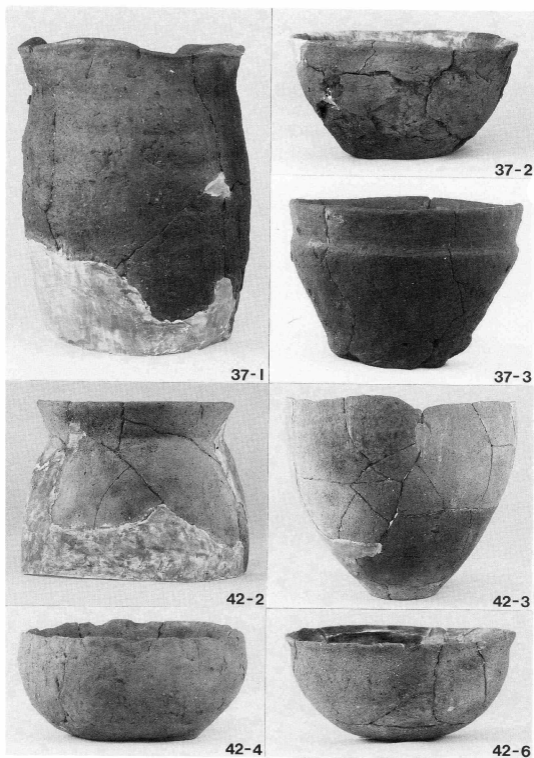
1. C地点SX-1

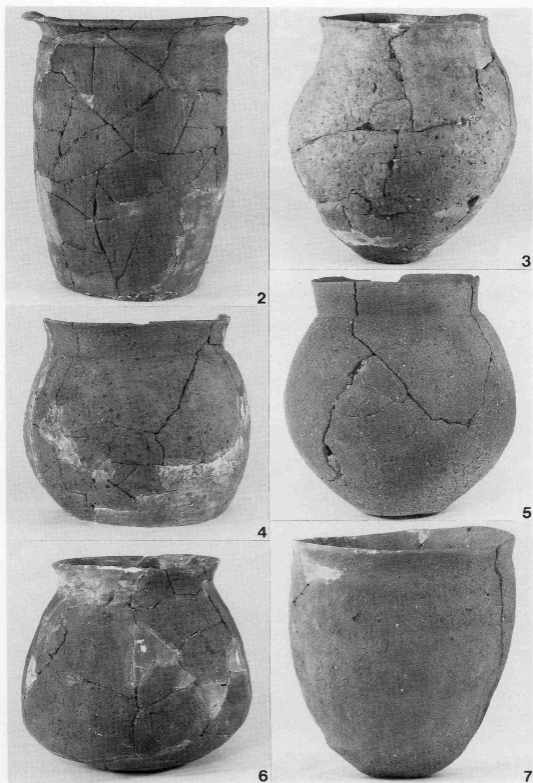


2. C地点黑色土遺物出土狀態

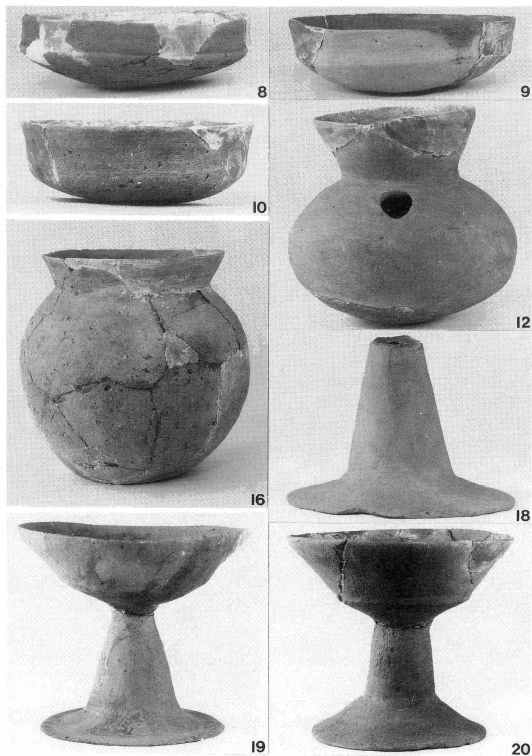








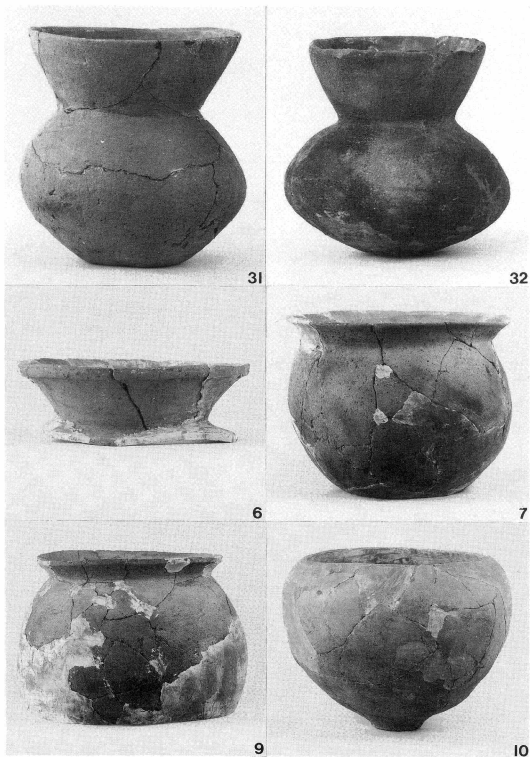
B地点河川跡出土土器(1)



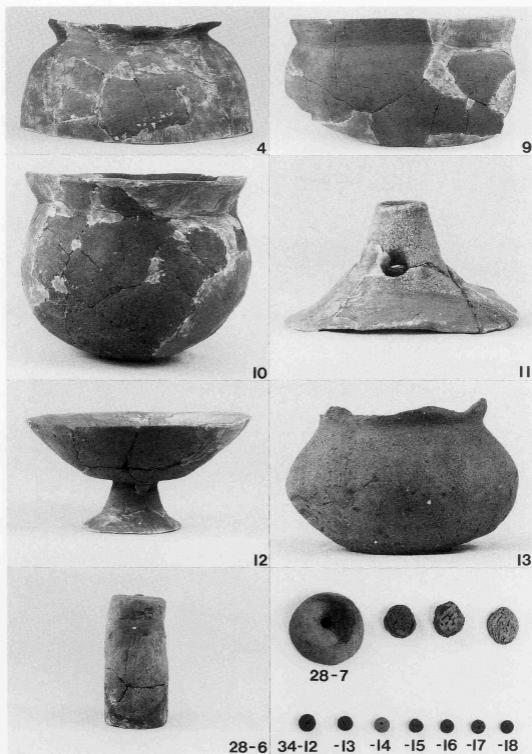
B地点河川跡出土土器(2)



B地点河川跡出土土器(3)



B地点河川跡出土土器(4)、C地点SX-1出土土器



C地点黑色土出土土器、土製品、桃核

児玉町遺跡調査会報告書第5集

## 川越田遺跡Ⅱ

(B・C地点の調査)

平成5年3月25日 印刷

平成5年3月25日 発行

発行所 児玉町遺跡調査会

埼玉県児玉郡児玉町大字八幡山368番地

印刷所 たつみ印刷株式会社

埼玉県深谷市大字東大沼356番地